

---

# 青春という名の日々に

tensuke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青春という名の日々に

### 【Zコード】

Z9344D

### 【作者名】

tensuke

### 【あらすじ】

玉木宏さんをモデルに書いています多感な高校生活を過ぐす二人の少年と一人の少女のそれぞれの視点から青春時代の甘酸っぱい恋愛を描いていきたいと思っています

## 1・大沢たかし 最初の一歩（前書き）

登場人物は玉木宏さんがモデルの「寺山宏クン」と大沢たかし少年 そして少女一人 それぞれの視点で各章を綴っていきます お付き合い下さい

## 1・大沢たかし 最初の一歩

### 1・大沢たかし 最初の一歩

「爪 自分で・・・切つただろ・・・」 卒業証書の入った筒を握る指先を見とがめた

「普通 自分で切るものじゃない?」 指先をいわらにかざしながら彼が答える

「深爪してる」

「そお?」

「器用なのに こうこうといふ 無頓着だよな・・・」

第2ボタンのみならず 全てのボタンをひきちぎられた学ランをお互い埃でもたたくように整えながら よつやくふつきり逃れてきた喧騒を振り返る

「気になった事 なかつたよ」 少し息を切らせながら 誰もいない所に逃げ切れた安堵に

彼はその頬を紅潮させながら よつやく緊張のとけた笑みを見せた  
「綺麗な指なんだ・・・とっても だから 爪も少し気をつけて・・・  
さ・・」

桜の木が立ち並ぶ 校舎の影になつた一画にたどり着き ほつと二人でため息をついた

「女の子じゃあるまいし (笑) どう気をつけろってこいつの」

「俺が・・・俺が切つてやる 今度からは」

今度から が本当に続いてゆくのか判らない別れの日に こんな台詞が口をついた

「ええつ!?(笑) 子供じゃあるまいし それはないでしょ」

「お前は 俺のものだから」 できるだけさりげなさを装つて言つてみた

「そおなの? (笑) 知らなかつたかも 俺 思つた以上に軽くし

れつと返された

「そう 爪の先まで全部 僕のものなの」 ひるみかかつた心にムチ打つた

くすりと小さく笑つた彼の指先をそつと包み込むようにして握った手に力をこめた

彼は引かれた手から崩れるよつにして笑いながら倒れ込んできた  
彼を胸に抱き止めて 握つた指先に口づけた  
くすぐつたいからやめてくれ と 彼はまた小さく笑つた  
抱き締めた しなやかなその身体を離したくなかった

ごわごわとした制服越しに 自分の心臓の鼓動が激しく響いているのを

彼に気づかれてしまつたに違いない

鼻先をくすぐる 柔らかい茶色の髪からほのかに甘い香りがした  
くすくすと笑い続ける彼を胸に抱き止めたまま 時が止まればいい  
と思った

桜の花びらが舞つ中で 自分の目の前にいる生き物は  
信じられない程に とてつもなく美しかつた

その美しい生き物を 誰にも渡したくない そう思った

白く小さなその顔にそつと手を添えると 彼は小さく首をかしげて  
こちらへその面を上向けた

「何？・・・どうした？」

小さな彼の問いかけに答えるかわりにその桜色の唇を奪つた

「・・・んつ・・・・・」

かすかに抗う彼の肩を引きもどし 脣の重なりを一層深くした

遠く 新生活へのスタートを励まし合い 別れを惜しむ声たちが響

いていた

卒業式

彼の友人といつ名の仮面を被つて過ごした3年間は終わりを告げた

「お・・大沢・・・・・ど・・・・・どう・・・・・うつむりで・・・・・おまえつ・  
・んつ・・・・・」

彼の戸惑い困惑した表情を見つめながら口づけを繰り返した  
逃れようともがくその細い腰を抱き寄せたまま  
これで 何が変わるのか  
自分でも 何も思い描けなかつた  
ただ 目の前の彼を 失いたくなかつた

あの日

無理矢理に踏み出した最初の一歩

今でも鮮明に思い出す

## 1・大沢たかし 最初の一歩（後書き）

「」感想・コメントなどお寄せ頂けますと  
今後の励みになります  
よろしくお願い致します

## 2・私・彼らの事

### 2・私・彼らのこと

愛する人がいて 愛されて自分の居場所を約束された人間は  
贅沢で我が儘で自分勝手である

愛は穏やかで暖かく 日向の水溜りがぬるまるよう  
ただそこにあるだけで心が暖められて  
ぬくぬくと縁側でまどろむ猫のようなおもむちになる

そして愛し愛されることに慣れてしまった人間は  
愚かにも その平和な日々を無意味で退屈な時間と勘違いする  
そして 恋といういばらの日々を懐かしみ  
その響きに憧れる

恋とか初恋とか 失恋に片想い  
そんな言葉たちはキラキラと美しくて眩しくて  
淡雪かもろいガラス細工のように はかなく纖細だ  
それでいて それらはとてもなくしなやかに強かで  
その期間限定な輝きは残酷だ

家族を持つ という事の意味を漠然としか理解していなかつたあの頃

その生活に憧れに似た思いすら抱いていたあの頃

恋という病の真っ只中にどっぷりと浸っていたあの頃

あの頃は 愛という穏やかな響きに夢見ていたのだと 今思つ

愛は穏やかで暖かい

相手を思い遣る心が伝わりあう時

静かに ただ 静かに時は流れる

彼らもまた こんな穏やかな時間をいつか手にいれるのだろうか  
そしてその時 彼らの傍らには いつたいどんな人が微笑んでいる  
のだろうか

彼らを思い出す

平和で単調な 平凡な日々の生活の中  
彼らを思い出す

彼らは私の思い出の中で輝いている

恋と言う病の特効薬はとっくの昔に処方された  
それは今以上を望まないこと 今を愛する事  
そして 何かをあきらめること

そんな免疫はしっかりと培養され

今私の恋というその病は取り付かない

そうした 穏やかで呑気な胸の中で 小さく小さく  
ちくりと痛んで彼らがよみがえる

あの頃・・・・・

彼と私ともう一人の彼がいたあの頃

懐かしいような 寂しいような 甘酸っぱい気分がこみ上げる

恋した少女と

恋された少年と

そしてもう一人の恋された少年の

今なら判る 今なら思い遣つてあげられる

私のちくりと痛む思いの話

書き留めて 心の外に出してしまおつ そつ思つ

## 2・私・彼らの事（後書き）

「メント・感想など頂けますと今後の励みになります  
よろしくお願い致します

### 3・青春時代

#### 3・青春と呼ばれる時代

映画のヒロインが言った台詞 「好きな人が好きなヒトを好きになりたい」

私の恋のはじまりは きっとこのヒロインの台詞そのものだった  
ただひとつ違つたのは 好きなヒトの好きなヒト も私の異性だった

だから

もしかして 映画のヒロインより ちょっと複雑で  
でも ヒロインよりも その人を好き になるのは簡単だったかも  
しれない  
なにしろ

私が好きになつたヒト も その人が大好きだつたヒト も  
素晴らしい見目麗しい美少年たちだつたから

私は一人を同時に恋する事に たいして困つた事も大変な事もなか  
つた

私たち3人は同じ高校の同級生だつた

私が最初に恋した美少年は 大沢たかし といつ名前の大柄な少年  
だつた

彼は野球部のエースで学年トップの座を誰にも譲らない秀才だつた

彼は同級生に限らず 先輩後輩 先生に至るまで人望も厚く

裏表のない穏やかな性格の 正義感と責任感にあふれた少年だつた

私は 友人たち数人と共に ミーハーなファンクラブのように彼を見つめていた

そして バレンタインデーにはチョココレートを贈った

彼は二二二二と女子たちからのチョコレートを丁寧なお礼と笑顔で受け取った

そして ホワイトデーには 母親が用意してくれた と言葉を添えて頬をうつすらと染めながら 律儀にもキャンディーの袋を配つて歩いた

そんな彼に私は淡い恋心を抱いていたのだと思う

そして 彼に憧れる少女たちの中から

どういう訳か 私は少しだけ特別なポジションを手にいれた

それは 私の幼馴染みに所以する

その彼は 寺山宏といい 水泳部の主将をしていた

大沢は 私を放課後に呼び出すと チョコレートのお礼とともに丁寧に私の思いに応える事はできず 恋人にはなれないと告げた

そんな大それた期待は持ち合わせていなかつた私は  
理由を問うつもりもなく はいそうですか とその場を去ろうとした  
そして呼び止められて でも限りなく近しい友人にはなれると思つ  
むしろ 積極的に そうなりたいのだと告げられて驚いた

なぜ?

その疑問に大沢は正直に私に告げた  
秘密を共有してほしい と

憧れの美少年から秘密を打ち明けられる

そんなシチュエーションは私の中で背景にバラの花を背負つていた  
憧れの美少年の秘密

それはぞくぞくするほど刺激的で 私的好奇心を刺激した  
私は二もなくその秘密を共有し かつ秘密を厳守することをその場で誓つた

大沢が私の視線を斜めに避けながら 傾いて打ち明けた秘密  
それは 私のぐくぐく近しい仲良しの幼馴染である寺山宏に  
大沢が友人以上の感情を抱いている という事だった

寺山宏は 少女と見紛う程の端正な顔立ちの少年だった  
長い睫に縁取られた薄茶の大きな瞳は無垢な草食動物を思わせた  
細い首と長い手足をもてあましているような  
しなやかな長身であった

少年期特有のどこか性別を超越したような中性的な雰囲気を纏い  
水泳部の主将として太陽の照りつけるプールサイドに立ち続けてい  
ても

その肌はぬけるように白く滑らかだった

宏の声は耳に心地よく響く甘い低音で

その声だけが どこかその少女めいた外見を裏切つ  
て不思議な魅力を放つていた

そして何より その性格はいたつて素直で温厚  
自分のすば抜けた容姿の素晴らしさにもまつたくの無頓着であり  
どこか纖細そうな線の細いその少女めいた外見から  
大沢のように女子たちからの熱い視線に常に追い回される  
というような事はなかつた

それでいて 寺山君は綺麗 という不思議な人気を誇つていた

家が近い事と 両親同士が昔からの友人ということもあります  
宏と私は生まれた時から 事あるごとに行動をともにする幼馴染だ  
った

幼稚園 小学校 習い事に至るまで

性別の違いを除けば ほぼ全ての面で 私と宏はいつも一緒だった

よくも悪くも平均値に甘んじる私と違い

宏は小さい頃からその天使のよつた可愛らしさと素直さで  
私と性別が逆だったらよかつたのにと 随分なことも言わってきた  
それでも 宏本人の性格の良さにカバーされ  
私は宏と比べられても何をしてもいじける事もくじける事もなく  
ただただ仲のよい異性の幼馴染といつの間にか  
中学 高校に至るまで その進路をともにしてきていた

あまりにも近くにいすぎたせいか

私は宏に異性を意識することがなかつた  
また 宏はそれほどに 18になろうかという年齢に至つても尚  
男臭い様子が微塵もなく  
ただ透明な ガラス細工のような美しさで存在し続けていた

大沢は 高校に入学してすぐ

特別クラスで同じクラスになつた宏の存在を認めていたという  
最初はただ やけに綺麗な顔の奴だなあと そんな感想だつたそうだ  
それがいつしか 気づくと宏の姿を目で追つて いる自分に  
気づいたのだそうだ

クラスが違うため 教室での宏の様子は知るよしもなかつたが  
時折催される特別クラスや 部活の時間などに その姿を捜してい  
たそつだ

きつかけはなんだつたのか？ と尋ねた私に  
大沢は ひどく照れくさそうに応えていつた  
宏が大沢の落とした消しゴムを拾い上げて渡してくれた時  
その細く長い指先があまりにも綺麗で見とれてしまったのだそつだ  
そして 視線の先に待ち構えていた宏の笑顔に釘付けとなり  
その日は夜眠れないほどに宏の笑顔が脳裏に焼きついたのだそつだ

恋と言つのは 本当に 「落ちる」 ものなのだと  
その時実感したのだそつだ

とにもかくにも

私は 学年 の いや学校きつてのヒーローである人気者の  
大沢たかし少年の秘密を共有することになった  
それはすなわち 私を挟んで 大沢は宏と親しい友人になりたい  
そのために私にチョコレートのお返しに  
他の少女たちよりも特別な 彼の仲のよい友人 というポジションを  
与えてよこした という事だつた

これは 平たく言つて 失恋なんだらうなあ と  
私はその時思つた

でも 不思議とあまりショックではなかつた  
恋と言う病に冒されていたというよりは  
恋する事に憧れていただけだったのかも知れない  
そんな事も案外冷静に思つたりもした

それでも

今まで何とも思わず近くにいて仲良く過ごしてきた宏はともかく  
友人たちときやーきやーと騒いで見つめていた大沢と  
急激にその距離を縮めた事に変わりはなく  
それはそれなりに 私にとつて喜ばしい事ではあつた  
また 友人たちにそれとない優越感を覚えたことも事実だつた

大沢の秘密を打ち明けられたホワイトデーを境に

大沢と宏と私の3人は 何かと共に連れ立つて歩く事が増えた  
登下校はもちろん 宿題を図書館で一緒にやつつけて  
その後 駅前のファーストフード店で他愛のない話をして笑いあい

大沢や宏の部活が終わるまで 私はどちらかの見学をして過ごしたりもした

試合があれば 差し入れを持つて応援にも行った

傍目に見たら 今まで通り 仲のよい私と宏の二人に  
大沢が加わった友人関係 そう見えていたに違いない  
私は 密かに自分だけが知る 大沢の秘密を楽しんでいた  
しかし 正直なところ私は 大沢の思いが成就する という展開については

全く考えていなかった

と いうよりも 自分を介して 見目麗しい一人が友人となつた事  
だけで  
もう大沢の望みは叶えられたものとさえ思つていた

私には 大沢の苦悩を思い遣る気遣いはなかつた  
思い至らなかつたというのが正直なところだ  
大沢が どれだけ宏の事を思つて いるのか  
あの頃の私には 気づけずにいた

### 3・青春時代（後書き）

「メント・感想など お寄せ頂けますと  
今後の励みになります  
よろしくお願い致します

#### 4・恋する事 愛する事 求める事

##### 4・恋する事 愛する事 求める事

都内のそこそこ名の通つた進学校だった  
私は宏にひきずられるようにして いや ひっぱつてもらひながら  
中学3年の夏から本腰を入れたという遅いスタートにも係わらず  
その文武両道を校訓とする歴史ある高校への入学を果たした

宏は田立つ程の成績を納めないかわりに  
まんべんなく そつなく全ての教科を平均点以上の成績ですごすと  
いう

不思議な特技を持つていた

そして何よりも 試験の山かけが奇跡のようにうまかった  
私の高校入試も前日に宏から示された予想問題が  
見事に当日の問題用紙に踊つていた事が勝因であつた

私はそもそも学業はごくごく普通の生徒であり

また 有名大学への進学を希望する生徒でもなかつた  
唯一進路の希望があるとすれば

好きな絵を描ける美術系の学校へ進みたいと秘かに思つていた  
しかしそれも将来の展望などひらかれるたちのものでもなく  
女子の美術屋などというものは

つぶしもきかなければ 職もないのが現実であり

私も結局は就職のありそうなデザイン系の学校へと田標を定めた

高校入学とほぼ同時に 3年後の進路を決めさせられるのも

この進学校の特徴でもあった

そして同時に 生徒達は何かしらのクラブ活動への参加が義務づけ

られており

文化系・運動系にかかわらず それらは 授業の単位と同等の評価  
が下された

その分 授業はそれぞれの生徒の希望する進路にそつてすすめられ  
きめ細かい指導もあり 例年 卒業生たちは華々しい結果を残して  
いった

私は正直なところ

この学校が自分にとつて相応しくない場所のように感じていた  
芳しくない成績を自覚していた事もあり  
宏がいなければ 不登校の生徒になっていたかも知れない  
毎朝 にこやかに登校を促しにやつてくる宏に連れられて  
私は 毎日重い足をひきずつて登校していた

そんな私が 学校を楽しいと思つきつかけになつたのが  
かの 野球部主将の大沢たかし少年であつた

所属する美術部の同級生に誘われて見学に行つたグラウンドで  
私は一目みるなり 彼の 大沢少年の姿に心を奪われていた  
それは私のキャンパスに描かれる彫像たちをしのぐ  
均整のとれた美しい筋肉に覆われた肢体

そして 不思議な力を宿した切れ長な黒い瞳  
きりりと結ばれた形のよい薄い唇

私は頭の中に一瞬のうちに彼の姿を写し取つていた

その日の帰り道 私は宏に大沢少年の事を夢中で語つた  
宏は静かな微笑みを浮かべたまま 私の興奮がおさまるまで  
じつとその話に耳を傾けていてくれた

結局 私は友人たちと共に大沢少年の大いなるファンになつたのだと  
宏に熱く訴え それは家の前に辿りついても尚語り尽くせず

私は宏の腕をひっぱつて家へと引きずり込み

晩ご飯を共にする事を強要し 食事が終わるまでしゃべり続けた

呆れたように肩をそびやかす母親とは対照的に  
宏はそれでもイヤな顔一つみせずに 時折「口一口」と頷きながら  
私の話を最期までちゃんと聞いてくれた

### 幼馴染み

そんな響きは正直びんとこない

お互に一人っ子だった事もあり 私と宏はまるで双子のようだ  
両方の親も そのどちらかが家にいればよいとまで思つてゐるふし  
もある程

どちらの家で 何をしようと何も言われなかつた

そして 食事もまた どちらの家ですませようと何も言われず た  
だ歓迎された

宏の両親は女の子が欲しかつたといい 私を可愛がり

私の両親もまた男の子が欲しかつたといい 宏を可愛がつた

お互いの初恋の話も語り合つた事があつた

宏は中学の同級生で おとなしくて可愛らしい女の子に恋をした

私はこつそり一人の仲をとりもどうと画策してみたが

残念な事に宏の恋は実らなかつた

彼女の答えは 宏君は優しすぎるから といつ不思議なものだつた

私の初恋は小学校6年生の時だつた

新学期にやつてきた転校生に恋をした

しかし彼は夏休みが終わる頃にはまた別の学校へと転校していつた

宏は夏休みの間中 私とその少年を誘つてプールへと出かけた  
一緒にくたくたになるまで遊び スイカを食べて 花火をした  
幼い恋は楽しいばかりの想い出になつた

そして今 宏は私につっこり言った

「大沢君はホントに格好いいよね 絵のモデルにはもつてこいだ」

宏は私の想いが恋ではないと知っていたのだと思う

憧れと恋は微妙に違う

お気に入りと恋もまた少し違う

好き は好きでも 犬も好き 猫も好き お花もチョコも 彼も好き

私の香気な想いは宏にはお見通しだったようだ

そしてくだんのバレンタイン

私は友人たちの勢いに飲まれて その場の雰囲気にのせられて

大沢少年へのチョコレートを調達した

思いもしない展開がまつていようとは 夢にも知らずに・・・

#### 4・恋する事 感じる事 求める事（後書き）

感想・コメントなど頂けますと  
今後の励みになります よろしくお願い致します

## 5・私・彼ら 高校の3年間

### 5・私・彼ら 高校の3年間

大沢少年がマウンドに立つとギャラリーから黄色い声援がとぶ  
グラウンドを取り囲むフェンスの金網に すがるように集まつた女  
生徒たち

私もその中の一人として 彼の雄姿に熱い視線を送つて いた  
それが抱えたスケッチブックに彼の姿をとらえる為であつたとしても  
私もまた彼を好ましく思つ 憧れに似た気持ちでいた事に間違ひは  
なく

当然のように 周囲の友人に誘われるがままに

その年のバレンタインデー

私は 大沢少年のためのチョコレートを選んだ  
高校1年の春だった

季節はめぐり かわらぬ毎日をすゞしながらも確実に時間は過ぎて  
いつた

私たちは高校2年の新学期 3人が同じクラスになつた

大沢少年の堪えきれずに溢れる嬉しそうな笑顔が眩しかつた  
担任教諭の「好きな場所に座つて良い」という言葉が終わらないう  
ちに

大沢少年は宏の隣の席に陣取つていた

多くの女生徒たちが大沢少年の近くに座席をとりたがり

私もまた 皆にまぎつて その席のためのあみだくじに参加した  
宏はただ二コ二コとそんな大騒ぎを静かに見つめていた

その年の夏

夏休みに入ると同時に宏の両親が離婚した

宏が高校に入学してすぐ 地方へ単身赴任となつていた父親が若い愛人と暮らし始めたことが原因だつた

宏は沈みがちな母親を気遣つて 随分と明るく振る舞つていた 予てから出張だの何だと家をあけている事の多かつた父親だからいなくなつたところで今更寂しくもない

そう言って 宏は心配する私たちにも笑顔を見せた

しかし 実際の所 宏もまた深く傷つき悩んでいたのだろうと思つ

宏の母親は離婚後半年で身体を壊し 入院した

父親側に一方的な非のある離婚であつたため

宏と母親には十分な慰謝料と養育費が支払われていた

母は与えられた養生の場で十分な治療を受ける事ができた

実質 一人暮らしになつてしまつた宏を心配した私の両親は時間を作つては宏の母を見舞い 宏の世話をかつてでていた さすがに同居する事にまでは首をたてに振らなかつた宏もできる限りは自分一人でやつてゆきたいと思うが

厚意はありがたく頂いて お世話になりますと深々と頭をさげた

宏の母の病状は一進一退をくりかえし

そうするうちに 鬱病を併発するに至り 医師の説明によれば自殺の恐れがあるため 退院させる事はできない との事だつた

夏休み中はほぼ毎日のように そして新学期が始まつてからも放課後 宏に付き添い 私と大沢少年はよく宏の母親の見舞いに行つた

私たちの顔を見ると 彼女は嬉しそうに昔と変わらぬ穏やかな優しく美しい笑顔を見せた

いつの頃からだろうか

宏は ただ静かに周囲を観察する 口数の少ない少年になつて いた  
どこか達観したような 年齢よりも大人びて見える少年に・・・

宏の母親が入院した年の秋 私たちは京都と奈良へ修学旅行へ行つた  
これが終わつてしまふと あとはもう大学受験にむけて  
本格的な勉強勉強の日々がやつてくる

私たちは 高校生活最期となるイベントを楽しみにしていた

京都・奈良ともに観光名所といわれる場所を巡つた

事前に構成されたグループごとに 私たちは寺や茶屋をきまに廻  
つた

大沢は常に宏の傍らにあり 穏やかな笑顔で宏を見つめていた

母親に土産を選ぶという宏に付き合つて

私たちは小さな土産物屋に足をとめた

可愛らしい布で作られた小物達が出迎えてくれた

宏は自分の母親と 私の母にもお揃いで可愛いがま口を買つてくれた  
二人の母に育てられているようなものだからと照れくさそうに笑つた

そして 自分のために小さな練りリップクリームを買つていた

大沢が不思議そうにそのリップを手にとつて眺めているのを

宏は可笑しそうにニコニコと見つめていた

宏は大沢のどことなく真面目で朴訥とした所を面白がつて いる節が  
ある

大沢の方でも 宏にかまわれるのはイヤでもないらしく  
いつも何を言われてもおとなしく受け止めていた

私は 時折この大沢少年と共有しているはずの「秘密」を忘れそ  
になる

それ程に 普段の大沢少年はいたつてあたりまえに  
ごくごく自然にあたりまえに宏の傍らに存在し  
ただただ仲の良い親友同士にしか見えなかつた

大沢が宏に恋をしている

私はその秘密を知つてゐる

そして 大沢のために 一人の距離が縮まるようにと友人の輪を広  
げた

共犯者？協力者？

私は就学旅行の企画実行部にも立候補した

二人の宿泊部屋を同室にするよう画策するためだつた  
そして見事 私は 京都も奈良も 宿泊するホテルでの  
ツインルームを 大沢・寺山同室にと裏工作に成功してゐた

「大沢君・・・・・

「なに？」

「この借りはしつかり返してもらいますよお～

「・・えつ？」

「同室にしてあげたんだからね・・・とぼけないでよ」

「あ・・・そうだつたんだ・・・やけにくじ運がいいなあつて思つ  
てた」

「単純なんだから・・・いつもながら で 宏にはナイショだから  
「うん ありがとう」

「あした どこかのお茶屋さんで」馳走してね（笑）  
「わかつた」

「でも・・・襲つたりして嫌われないようにね（笑）  
「おつ・・・おそつたりしないよ・・・たぶん」

「たぶん」

「うん・・・努力する」

「ははは（笑）」

私は実のところ この時 少年が少年に恋する心理をあまり深く考  
えていなかつた

二人がどうこうなる などというイメージさえ浮かばずにいた  
ただ もし自分が好きな人と同室だったら嬉しいだろうなあ・・・  
そういった 実に子供じみた単純な思いのみが心にあつたように思つ  
だから

そんな私の余計なお世話が 大沢少年の心を大いに揺さぶり悩ませ  
苦しませる事に

なろうとは 思いもよらない事だつた

三泊四日の旅は 大沢にとつて まさに据え膳ああづけ状態だつた  
ワケで

17歳の少年には過酷な試練だつたに違ひない

残念な事に 後にも先にも 私はこの時の話を大沢少年から聞く事  
はなかつた  
宏もまた 何も語らず  
おそらくは 何事もなく 大沢少年ただ一人を眠れぬ夜に縛り付け  
た旅であつた

## 6・大沢たかし・恋に悩む日々を

6・大沢たかし 恋に悩む日々を

高2の秋 高校生活最期のビッグイベント 京都・奈良の就学旅行  
があつた

「指で唇に塗るんだよ」

「へえ・・・・・柚子の香りがするんだ・・・」

「俺 いつも冬になると唇がガサガサになるから」

「へえ・・・・・」

「大沢はならない?」

「・・・・・ 気にしたことなかつた・・・・・」

「タバコ 吸つてると余計になるよ」

「えつ? 寺山 タバコ吸つてたっけ? ?」

「はははは(笑) やだな 大沢の事いつてるのに」

「俺? ・・・ああ・・・そうね」

「タバコを吸う女の子はよくないよお 肌も荒れるしキスが苦くな  
る」

「・・・・・えつ・・・・・」

「はははは(笑)」

「なつ・・・からかうなよ 寺山」

「ははは(笑) ああ でも二人とも吸つてたら気にならないのか  
なあ・・・・・」

観光名所を巡り歩き回っていた途中 立ち寄った土産物店で

宏は俺に見せつけるようにして 試供品のリップクリームをその長く

綺麗な指先で自分の唇に塗つて見せた

宏の 男にしては少しふつくらと厚い唇が ふるりと桜色に艶やいだ

俺は目の前の指先と唇から視線が離せなくなつた  
頭の中が白く霞むようだつた

タバコ？キスが苦くなる？

二人とも吸つてたら気にならない？？

どうして俺にそんなことを言つんだ？宏・・・俺の気持ち・・・知ら  
ないで・・・

大沢の思いは千々に乱れた

そんな大沢の思いを知つてか知らずか

宏はリップクリームを塗つた唇を尖らせるようにして  
隣にたつ大沢の顔を見る

「て・・・寺山？」

「んつ ほら このクリーム気持ちいいよ」

そう言つて 宏は艶然と微笑んだ

そして 何事もなかつたように 店の中を見回すと  
古い着物の生地で作られた可愛い鹿のぬいぐるみを手にとつた  
「これがあわいいなあ 何色のにしようかなあ・・・」  
「えつ・・・買うの？」

「だめ？」

「だ・・だめな事ないけど お土産？」

「いや 僕の」

「寺山・・・の・・・・」

「うん」

可愛いいな・・・そう思つた とてもとても愛おしかつた

俺のこんな想いを宏は知らない

ただ一人 俺の宏への想いを胸におさめている彼女

彼女は宏の幼馴染み

俺は初めて彼女と宏が並んで歩く姿を見かけた時

心臓をじかに鷲掴みにされたようなショックを受けた  
宏のガールフレンドだと勘違いしたせいだった

その後 彼女が俺にバレンタインデーのチョコレートをくれるに至り  
俺は宏と彼女の関係を知った

そして 俺は姑息にも彼女に全てを打ち明けて  
どうにか宏の傍らに自分の立ち位置を手に入れた  
さして時間もかからずに 俺は一人と親しい友人になった  
宏が俺に寄せてくれる信頼と 向けてくれる好意は友人のそれだ  
親友 という響きが俺にはとげとげしく胸に刺さる  
そんなものになりたいんじゃない

俺は

俺は宏をこの手に抱きたいのだ

宏の白いうなじが目の前にある  
真剣な眼差しで 可愛いなあとつぶやきながら  
ぬいぐるみを選んでいる宏の後ろ姿  
俺より少しだけ背の低い宏のうなじが 少し見下ろす目の前にある  
吸い寄せられそうな白い滑らかな肌

このうなじを 少しきつく吸つたら

白い肌に きっと淡い紅色の花が咲くだろう  
あの唇をそつと吸つたなら 甘い吐息がこぼれるだろうか  
この腕の中に抱き締めたら

あの胸元にひつそりと息づいている小さな果実を啄んでみたい  
いつか部活の後 大浴場でみかけた宏の裸身が蘇る  
ひきしまった腰 男にしては丸く形の良い小さな尻には小さなく  
ぼがあつたつけ

そんな不埒な想いに沈みかけた時

ふと振り向いた宏の瞳と視線が合つた

何もかもを見透かされているかのような その艶めいた視線

（俺を抱きたいの？）

そう挑発しているかのような宏の眼差し

ありえない

宏は俺の気持ちなど知りはしない

高鳴る胸の鼓動が 宏に聞こえてしまいやしないかと

俺は無意識に店の外へと踵をかえす

「待つて 大沢 これ買つたらいくから・・・・・・

「・・・・そ・・外で待つてる」

「うん」

背後からかけられた宏の声から逃れるように店を出た

いつか・・・いつかこの想いを

自分で持て余し 手放すのか

それとも

いつかこの想いを宏にぶつけてしまつのか

その時

俺たちは ビニへむかつていいくのだろうか・・・・

## 7・大沢たかし 月夜に

7・大沢たかし 月夜に

京都の月夜を見上げていた

ホテルの窓は小さい

高校生が大挙して逗留できるようなホテルはさして多くはない  
それはそう大きくもないビジネスホテル  
駅から近いのだけが取り柄だらう

ツインといつても 狹い部屋にベッドがぎゅうぎゅうつにつけられても一緒のユニットバス

旅行の荷物をほどくスペースもない程の部屋で

俺と宏はそれぞれのベッドの上にいた

窓際のベッドに陣取つた俺は ベッドに腰掛けて窓から見える月を見上げていた

宏はシャワーをつかう準備をして ベッドを降りていった  
ほどなく シャワーの音が響いてきた

いやでも脳裏に宏の裸身がよぎつてしまつ

今 あの扉を開けて押し入つたら 宏はどうするだらうか  
押し入つて その白く滑らかな肌を抱き締めて

触れたい

この手で・・・・触れてみたい

身体の中心に全身の血液が集まるような熱を感じていた

「大沢あー お先に シャワービーナー」

「あつ・ああ・・・・・ありがとう」

そそくさと着替えを掴むと宏と入れ違いにバスルームに入った  
すれ違う時に、濡れ髪から甘い香りが零れた

眩がした

短パンに素足 上半身にはバスタオルをはおつただけの姿  
頭からかぶつたそのタオルで濡れ髪を拭いている  
ベッドに腰を下ろした宏と視線が絡む

「なに? 大沢・・・」

「いや・・・なんでもない・・・シャワーももう

「ん」

そんなに無防備な顔を見せないでくれ  
そんなに無防備に俺を誘惑しないでくれ  
お前の身体からは蜜の香りがする 匀い立つよつた色気に田が眩む  
同性の裸身にこんなに困惑するなんて  
頭がくらくらする  
俺は冷ための湯を頭からかぶつた

バスルームから出た時

宏はベッドカバーもはがさないままに 大の字に寝こりび  
すうすうと穏やかな寝息をたてていた  
俺はその傍らにしばし立ち尽くしていた

綺麗な寝顔だと思った

長い睫が白い頬に淡い影を落とし

細い鼻梁に続くふつくらと紅い唇がうつすらと開いている

禁断の果実だ そう思った

部屋の電気を落とすと 宏の足元からベッドカバーをめくると  
そつと肩までひきあげてやつた  
小さな伸びをしながら むにゅむにゅと寝ぼけた声が聞こえた  
可愛い

押さえきれない衝動に突き動かされて 僕はそつと顔を寄せた  
唇が重なる瞬間 身体に電気が走った気がした  
柔らかくて 甘い唇だった

天使のような寝顔なのに その魔性の罠にどつぶりとハマッた  
俺はもう逃れられない  
逃れようとも思わない

一生 この美しくも妖しい生き物の虜なのだ

三泊四日 後にも先にも 僕が妖しい衝動に負けたのは  
この一回きりだった  
けれど

そのかわり 僕は最終日まで眠れぬ夜を過ごし  
帰りの新幹線は 宏の肩にもたれて爆睡するという醜態をさらした  
ヨダレを垂らさなかつたのがせめてもの救いだ

この旅行で 宏の甘い香りが

彼の愛用のボディクリームの香りだと初めて知った  
乾燥肌なんだ そういうていたつけ

鼻をくすぐる甘い香り

ある意味トラウマになるな

これから先ずっと この香りを嗅ぐと 犬のように俺は  
反射的に宏を想いだし そして全身の血が滾るのだ・・・

修学旅行 甘く切ない青春の想い出になる日がくるのだろうか  
悪魔に魅入られた想い出だ

## 7・大沢たかし 月夜に（後書き）

大沢少年の自制心 エライなあ・・と（爆）  
書いてて思いました  
感想・コメントなど頂けますと  
今後の励みになります よろしくお願ひ致します

## 8・私・そして卒業

### 8・私・そして卒業

修学旅行から戻つて2日目に 私は大沢少年と二人で話をした  
放課後 宏が部活の最期の引継ぎがあると教室を出て行つた後  
私は大沢少年に呼び止められ そのまま人気のない理科準備室へと  
いざなわれ 周囲に人影のない事を確認し  
さらに 声をひそめた大沢少年から「秘密」の続きを告白された

自分の胸の内だけに留めてはおけない程に  
大沢少年の中で宏の存在は更に大きくなり 苦しくてならないのだ  
という

そして 私の画策のおかげで勝ち得た 三泊四日の「同室」は  
苦行以外の何物でもなかつた  
これは少し抗議めいた口調で打ち明けられた

私には正直あまりぴんと来ない話であり  
よかれと思つてした事に 非難めいた言葉を向けられたのがやや  
納得のいかない程だつた

大沢少年は私に神妙な顔で訴えた

自分は寺山宏を一人の親しい友人としての存在以外に  
たまらなく性欲を刺激される対象として見てしまつ事が止められない  
こんな自分は異常なのではないだろうか  
可愛らしい女生徒よりも誰よりも  
寺山宏が可愛く思えてならず またその思いは募るばかりなのだと

私はしばらく考えたのち じぶんく当たり前の返答をした

好きになってしまった事に理由などないのだと思つ

相手が異性であろうと同性であろうと

この際 大きな問題ではないのではないか

もちろん マイノリティーで在ることは否めないが

本人が覚悟を持つて望むなら

恋に正解も不正解もないのではないか

そのような事を言つたと思つ

大沢少年はほつと小さなため息をついたのち

私と友人になれて本当によかつたとつぶやいた

異性である私とこそ友情を育み

同性の宏につらい恋心を抱いてしまつたこの少年に

私はいくばくかの同情めいた思いも感じていた

その一方で

私ははてしない好奇心にそそのかされていた

このまま この一人が想い合つ口がやつてくるのかどうか

その日以来

私はあらためて 18年間近しくあつた幼馴染みを観察し直してみた

寺山宏 性別 男 年齢18歳

身長180センチ 体重60キロ

一見 華奢な程細く見えるが 実のところ意外にもしつかりとした

美しい筋肉に覆われたバランスの良い体格をしている

小さな顔に細く長い首 そして長い手足でスタイルが良い

水泳が得意だ

それは優雅な美しいフォームで泳ぐ

顔立ちは どこか古風な美人女優を思わせるような  
長い睫に縁取られた大きな瞳が印象的な美形である  
少しほつてりと厚い唇が ほのかな色香を匂わせる

女生徒たちは宏の事を 少女漫画から抜け出してきたようだと云つ  
優しい性格が表れる静かに穏やかな笑顔は  
くつきりと深い笑窪を刻み 人懐こい雰囲気をかもす  
その一方で ちらりと視線を移すその瞬間に  
たまらなく淫猥な艶めいた色気をふりまく事がある

案外 女生徒たちのみならず 男子生徒の中にも大沢少年同様に  
宏の容姿とその垂れ流しのフェロモンに陥落している者がいるのか  
もしれない

そんな事に思い至った

幼馴染みであり あまりにも近くにいすぎたせいでも  
気づかずにきた宏のあまりにも無防備に垂れ流されている色気に  
今更ながらに目が覚めた思いがした

大沢少年が 宏と枕を並べて安眠できなかつた理由が  
ようやく私にも少し理解できてきた

宏本人には何の意識も意図もなく  
ただただ天然と思われる屈託のなさで周囲を戸惑わせる  
大沢少年の嘆いた 悪魔的だの魔性だのといった言葉たちが  
ようやく私にも少し理解できてきた

ようやく

そう すべてがようやく

それでも まだまだ 私には他人事であり  
好奇心と興味のある対象でしかなかつた

大沢少年と寺山宏

どちらが最初の一歩を踏み出すのだろうか  
それとも どちらかが先に逃げ出すのだろうか

私は ただ その結末が知りたいと強烈に思つて いた  
残された日々は多くはなく  
桜はあつ というまに散り

受験対策クラス編成になつた3年の新学期  
私たちはそれぞれ別々のクラスになつていた

私は 二人と過ごす時間が少なくなつていつた  
それでも 放課後にはともに図書館へとむかい  
それぞれの参考書と格闘して過ごしたりした  
時折 大沢少年に その後何か進展はあつたのかと  
小声で尋ねてみても

その都度 彼の哀しげに首を横にふる仕草が痛々しかつた

宏に

私が宏に「大沢君の事 どう思つて いるの?」と

そう切り出せばよいのだろうか?

「あんたはその気はないの?」とせつつけばよいのだろうか?

そんな私の素朴な思いつきに

大沢少年は激しく動搖した様子できつい調子で応えた  
どうか そんな事だけはしてくれるな と  
いつかきっと 自分できちんと決着をつけてみせるから  
そう言って 大沢少年は静かに微笑んで見せた

いつしか 私のスケッチブックには

習作と題された 宏と大沢少年のデッサンばかりが溜まつていつた  
卒業 という別れの季節が迫つていた

## 9・大沢たかし・卒業

9・卒業・大沢たかし

彼女に励まされた 恋に正解はない と  
俺の恋も 成就を夢見て何も悪い事などない と

同性に恋をする それは確かに普通の恋路とは異なり  
明らかにマイノリティーとしてのイバラの道がまつて いる  
それでも 今 俺は宏という存在以外を  
心の中に描く事ができない

それぞれの進路が定まつた時 それは卒業という別れの時の  
訪れを意味していた  
彼女は希望通りのデザイン科のある短大へと入学を決めた  
宏は入院中の母親を気遣つてか  
当初希望していた授業料の高い私大を諦め  
横浜郊外にある国立大の建築学科に合格した  
俺は医学部の不合格をうけ 急遽2次募集の法学部を受験し  
某国立大学に入学を決めた

そして迎えた卒業式

穏やかに広がる青い空に 桜の花が散る  
同級生や後輩たちに取り囲まれて  
学ランのボタンをねこそぎもぎ取られた  
見回せば 宏もまた同様に女子たちの黒だかりの中でも  
困惑したような笑顔でこちらを見ていた

逃げよう

そう田で訴えた

このままでは中に着たワイシャツのボタンまで  
引きちぎられそうな気配にさすがに恐怖を感じていた  
宏もまた同様であつたのだろう  
俺の田線に頷くと 周囲の女生徒を気遣いながらも  
人垣を搔き分けて逃げ出した

二人 かなりの速さで走つて校舎の裏手へと逃げ込んだ  
さすがにもう誰も後を追つてはこなかつた  
はあはあと息をきらした宏が桜の木に手をついた  
花びらがはらはらと宏の上にも舞い散つた  
桜の精のようだと思つた

抱き締めたい ふとこみ上げてくる衝動に身震いした  
お互の手に握られている卒業証書の筒だけが  
今日が本当に最期の日なのだと俺に訴えている  
変わらず いつまでも続いてゆくと信じて疑わなかつた日々も  
いつして何かしらの終止符はうたれてゆく

友情が終わるわけじゃない

一生の別れなわけじゃない

二度と会えなくなるワケでもなし

それでも

今日を逃したら

一生 そのチャンスは巡つてこないような  
そんな思いに取り憑かれていた

俺は 宏の手をとり引き寄せた

拒まれれば そのまま玉砕してもいいと思つた

重ねた唇は柔らかく 甘かつた

どういうつもりだと俺を睨んだ宏の瞳が潤んでいた  
その瞳には 必死の形相の俺が映りこんでいた

離したくないのだ

このまま抱き締めたまま連れ去りたいのだ

誰にも渡したくない

今ここで俺だけのものにしたい

そんな必死の思いが俺の瞳に熱い怪しい炎を灯していた

「はなして・・・離せよ 大沢つ！」

「イヤだ」

「何のつもりなんだ・・・一体・・・」

「お前が好きだ」

「なつ・・・・・」

「お前がずっと好きだった 寺山の・・・宏の事だけを見つめて  
高校の3年間を過ごしてきた 宏の事が・・・好きなんだ」

「お・・大沢・・・」

宏の身体から抗う力が抜けた

一層強く抱き締めたら 僕の腕の中で小さなため息が零れた

「・・・・大沢・・・」

小さくつぶやく彼の唇を再び奪った

宏のくつたりと力の抜けた身体を抱き締めて  
深い口づけに夢中になった

抱き締めた胸元が熱かつた

ボタンを全て失った学ランは前立てがはだけ

下に着たシャツの薄い生地越しに宏の胸のささやかな突起が見える

思わず 指先でその小さな尖りに触れた

宏の身体がぴくりと震え 重ねた唇が小さく喘いで開かれた

「やっ・・・やめっ・・・お大沢・・いやだ・・」

言葉とは裏腹に 崩れ落ちそうに俺にしがみついてくる宏が愛おしかつた

抱き止めて桜の樹に宏の背を押し当てた

そのままその白い首筋に唇を這わせ

シャツのボタンを外していくた

露わになつた胸元に可憐な花の蕾のよつてつりと紅く色づいた

胸の突起が震えていた

口づけて 舌で転がすよつと弄ぶと宏の口から甘い吐息が漏れた

もう止められない

身体を起こし 宏を抱き締め直すとその耳元に囁いた

「抱かせて・・・・・」

## 10・寺山宏・最初の一歩

10・最初の一歩 - 寺山宏

何が起こっているのかさっぱり判らなかつた  
目の前に 見慣れたハズの

しかし 見知らぬ男の顔があつた

その瞳は焼き殺されてしまうかと思つほど熱く  
魅入られて 身動きひとつできなくなる

こんな男 知らない いつもの奴じやない・・・

爪がどうとか・・・言われて・・・

手をとられて 抱き寄せられて

何が何だか判らず ふざけているのだとばかり思つていた  
だから

居心地の悪い いつもと違う熱い眼差しに  
戸惑つて 胸の鼓動が高鳴つてしまつ

気づかれたくなくて 誤魔化したくて  
ただ笑つてみせるしかなかつた

その真剣な顔が迫つてくるのを避けられなかつた  
鼻先が触れそうになつて思わず目を閉じかけた  
なんだこれ・・・

必死の思いでもがいたのに  
身体には力が入らない

抱き締められて 背中に回された奴の手が熱い

いや

身体中が熱い 熱い

重ねられた唇から全身の力が吸い取られてゆくみたいだ

親友

そう思つていた男の唇は 熱く 熱く 蕩けるように甘い口づけ  
はだけられた胸元にその指先が這つて  
ぞわりと全身にたまらない震えが走る

何なんだ

何なんだ 一体

どういうつもりで・・・こんな

混乱する思考

そのまま白く靄がかかつてゆく

その存在すら忘れていた胸のささやかな突起を摘まれて  
がくりと足のちからが抜けた

崩れ落ちそうな身体を抱き止められて  
桜の樹に押しつけられて

首筋に吐息がかかる

もう

何も考えられない

耳に聞こえた言葉の意味すら考えられない

「抱かせて」

それは

どういうこと?

ここにいる男は俺の親友だろ?

高校3年間をともに過ごしてきた親友だろ?

いつも俺の傍らにいて

いつも穏やかな笑顔で

いつも面白おかしくふざけ合つて

側にいるのがいつしか当たり前になつていた

そんな存在

今 目の前にいる男は誰だ?  
俺の事を好きだという  
ずっと俺だけを見つめてきたという  
そして

俺を抱き締めて唇を重ねる

甘い口づけに縫い止められたように動けなくなる

今 思い出した

俺のファーストキスだ・・・

どうしてくれるんだ

大沢

どうしてくれるんだ

俺を

どうしたいっていうんだ

このまま

言われるままに身を任せたら  
何が起こる?

## 10・寺山宏・最初の一歩（後書き）

「メント・感想など 頂けますと  
今後の励みになります  
よろしくお願い致します

## 11・恋が許す範囲

### 11・恋が許す範囲

「抱かせて・・・寺山・・・」

「なつ・・・何言つてんの大沢」

「お前の全てを俺にくれよ」

「んつ・・・やつ・・・やめひつて・・・人が来たら・・・」

「人の来ない所にい」?」

「そうじやなくて・・・」

桜の花びらが舞い散る中

樹の幹にその背を預けたまま

大沢の繰り返される口づけと 胸元への執拗な愛撫を受け  
宏の思考は徐々に鈍り 白い靄の向こうへと歩み出していた  
それでも 最期の気力を振り絞つて大沢の手をふりほどくつと  
小さく身をよじつてみる

それでもその身体は解放される事なく

かえつて強く 大沢の広い胸に抱き込まれてしまふ  
そして耳元で繰り返し囁かれる甘い言葉に

意識が遠のき始める

胸元に芽生えた小さな疼くような快感が  
静かに宏の全身の血を下腹部へと集めてくる

「もつ・・・やめ・・やめて大沢・・・俺 おかしくなる・・・」

「おかしくなれ」

「何言つてんだ サっきから お前 へん」

「変なんじやない 正直になつただけだ」

「余計判らないよ……頼むから離して……」

「離したら一度と戻つてこない」

「何いつて……」

「逃げないでくれ 宏」

「大沢……」

繰り返される告白は宏の耳朵をくすぐり

その吐息がかかる度に身体の震えが大きくなつていく  
ずるずると足元から崩れ落ちそうになる

「と・・とにかく 人が来たら……」  
「学校……」

「もう卒業した」

「そういうても まだこんな・・・大沢っ！…」

「帰るつ」

「ちよつ・・・大沢」

大沢は宏の腕を掴むと 乱れたシャツも学ランもそのままに  
宏の肩を抱くようにして裏門へとむかつて歩き始めた  
強引に与えられた刺激と数え切れない程の口づけに  
宏の目元は紅色に染まり その足取りはあやうかつた  
そんな宏を半ば抱えるようにして大沢は歩く

「は・・離せよ 大沢 一人で歩けるつ！」

「離したら逃げるだろ お前」

「あ・・当たり前だ 離せつ！」

「いやだ」

「何なんだよお！ホントに 怒るぞ」

「怒つた顔もいい」

「・・・・！」

どうやらふざけているのではないらしい様子が  
ようやく宏にも何か伝わってきて

大沢の厳しい横顔に 宏は思わず口をつぐんだ

そのまま

大沢にひきづられるようにして 宏は学校を後にした  
ふと 頭の片隅を幼馴染みの少女の顔がよぎった  
いつも 3人でいたよなあ・・・ほんやりと  
そんなことを思った

そして 今更に いくつかの出来事が思い出され  
その全てが彼女の画策によるものだつたのだろうと  
なぜかすつきりと納得がいく気分になった

彼女は大沢の気持ちを知っていたに違いない

自分ではなく 僕に 寺山宏という男に向かっていた大沢の心  
彼女はそれを知つて 僕と大沢の間にいつもいたのだと  
恋のキュー・ピットにでもなつたつもりだつたのか?  
大沢の俺への想いを成就させようと思つていたのか?  
男同士だぞ 一体何を考えてるんだ  
そもそもなんで俺なんだ?

大沢の気持ちが今ひとつ判らない

ざわざわと心が次々と疑問符の台詞を吐き出しては震える  
俺

そういうえば 恋 したことなかつたなあ・・・この3年間  
大沢と幼馴染みと俺の3人  
それが揃つていれば他には何もいらなかつた  
そのどちらかを失う事も  
考えた事もなかつた

今 僕は大沢を失おうとしているのか?

俺の拒絶の理由は？

男だから？

本当にそうなのか？

俺は 大沢にどんな感情を持つていた？

親友だ カケガエのない友人だ

だから 大沢に恋人が出来ても

他の誰かの隣で微笑んでも

それは俺にとつても嬉しいこと

嬉しいこと

嬉しいこと？

嬉しい事のハズじやないか？

なぜ俺の心は乱れる？

大沢の隣で微笑む誰かを想像した時に こんなにも胸が痛むのは

どうしてなんだ？

独占欲

すぎた友情

子供じみた嫉妬心

求められて 心のどこかで首を縦にふる自分がいる事に驚いた  
やめてくれ はなしてくれ どういうつもりだ

口から零れる言葉達が 心の叫びとは食い違っているように思える  
大沢の手のぬくもりが心地よくて

重ねられる唇に夢中になった

胸元をさぐられて たまらない愉悦が全身を駆けた

正直になつただけ

大沢はそう言った

それでは 俺の正直な心は何と言つていいる？  
耳をすませてみよう

自分の心の声に

恐い

正直になる事がこんなにも恐いことは知らなかつた

この恐怖をねじこんで 大沢は俺を抱き締めたのか

抱き締められて 俺の心の中のホントが目を覚まそうとしている

ホントは

ホントは

俺は 恋が許す範囲にとどまつていられない

肩を抱かれ 裏門をでた

「大沢・・・俺の・・・俺のうち」

「お前んち」

「行こう」

俺は 大沢の熱にやかれてみたないと強烈に思つた

ばかな・・・

何かが かわろうとしていた

二人の間で

俺の中で

## 12・結ばれて 気づくこと

どうやって たどり着いたのか覚えていない  
気がついた時には 大沢に即されて部屋の鍵を開けていた  
母が入院してから一人で暮らす部屋は学校からほど近く  
入居者のほとんどが独身者の一人住まい

ワンルームの集合住宅

良く言えばマンション ひらたくいって普通のアパートだ

狭い玄関にもつれ合いつようにして転がり込み

大沢が後ろ手に扉をしめて鍵をかけるのを気配で知った  
それ程に 意識は朦朧としていた

気がつけば 広くもない部屋の中 そのほとんどのスペースを  
占めているベッドの上に 重なり合いつように倒れ込んでいた  
貪るように唇を奪われ 口づけが深くなる

大沢の舌が口腔に忍び込んできた  
目眩がする

「宏・・・・」

大沢の吐息に混ざる囁きが耳朶をくすぐる  
名前を呼ばれて首筋に甘い痺れが走った

「宏・・・・」

うかされたように名前を繰り返す大沢の手がするりとシャツの中に  
忍び込み 自分では決して触れる事のない  
その存在すら忘れていたような尖りに指が這う  
ぞくりと背中が反り返つてしまつ

それは軽く爪でかかれただけで その存在を主張する

むず痒いような愉悦がわき起こつてくる

「宏・・・ひろし・・・」

気づけば シャツのボタンは全て外され  
ひんやりとした空気が胸元に流れ込む  
しかし 甘い痺れに似た熱い感触が胸の尖りを包む  
大沢の舌がそれを転がし押しつぶすように弄び  
軽く歯をたてられて思わず小さな悲鳴が口をつく  
「ひやつ・・・あつ・・・・」

自分の声とは思えない程に甘く爛れた音が漏れる

ただ 人目を避けたかつただけ  
校舎の裏とはいえ いつ誰がやつてくるかも判らないような  
桜吹雪の中から逃れたかつただけ  
だから家に帰りたいと訴えただけ  
こんな事を望んだわけじやない

俺は

ホントに?

もつと

もつとと 大沢の唇と肉体に欲望を覚えたのではなかつたか?

自分の中に芽生えているやり場のない  
たぎり わき起こる感情が判らない

覆い被さるように抱きすくめられた身体が熱い

大沢の身体の熱がたまらない

自分と同じ構造の身体が熱く昂ぶつて押しつけられている  
その固くしこつた熱が 自分にも備わっている事を感じる  
擦り合わせるように腰が揺れてしまうのを止められない  
自分の身体が意志を裏切つていく

思考が追いつかない

恐い

恐いのに 大沢の手をふりほどけない  
その唇から逃れられない

口づけを せがむようにすがりついてしまう  
気づけば 下着ごとズボンを引き下ろされ

自分が恐ろしく感じて昂ぶつていた事を知らされる  
大沢の大きな手に包まれてそれは甘い蜜を滲ませる  
もどかしそうに自らもズボンの前をくつろげて

解放された大沢の昂ぶりがキスするように俺のそれに触れ合わされる  
「あっ・・・」

瞬間 頭の中に白いスパークが飛んだ  
大沢の手が一人の昂ぶりを一掴みに重ねて  
ゆっくりと擦りあげる

その動きに腰が耐えきれずイヤらしく揺れるのが自分でも判る

「おっ 大沢あ・・・んんっ・・・」  
「宏・・・ひろし・・・このまま もすこしだけ・・・」  
「や・・・やだ・・大沢 やだ もう 離して・・・」

自分のものなのか  
大沢のもののか

判らない激しい脈打つ響きが脳髄を直撃する  
甘い陶酔感に襲われて

かろうじて繋ぎ止めていた意識を手放した

大沢の手の中に 熱い飛沫を放つていた

## 12・結婚式で 気づいた（後書き）

「メント・感想など頂けますと今後の励みになります  
よろしくお願いいたします」

### 13・ダ・カーポ そして フィーネまで

「13・ダ・カーポ そして フィーネまで

「宏・・・ひろし・・・」

「はなせつ 離せ大沢つーもうこいだらひつー離してくれつー  
・・・・ひろし・・・」

宏は大沢の胸を押し戻すように腕をつっぱった  
抱き締められた腕の中から逃れようと身をよじる宏を  
大沢は逃すまいとするように より深く抱き込もうとする  
見上げて睨み付けようとする宏の瞳は潤み  
田の周りがほんのりと上気したように紅色に染まっている

「離せ・・・」

「いやだ」

「もう気が済んだだらひつー離れひつー」

「いやだ」

「何だつて言うんだつー・・・んな・・・・・んな

「お前が欲しい」

「落ち着け・・・大沢・・・な?」

「俺は冷静だ」

「おかしいだろ?・・・んなこと・・・普通じゃない!」

「恋愛に普通も何もないだらひつ」

「俺は男だぞ?」

「好きなものは好きで何が悪い・・・」

「・・・・・ひつ・・・・」

大沢のたじろぐことのない真つ直ぐな視線に

宏は言葉を失った

迷いのない大沢の言葉は宏の胸に刺さる

「どうしてそんなに・・・何の躊躇もなく言い切れるんだ」

「この3年間で出した答えた」

「俺には何の猶予もないのか?」

「俺を好きになってくれ」

「好きだよ 親友だろ」

「親友以上にしてくれ」

「どういう事なのか 僕には判らない」

「身体を繋ぎたい お前の全てを欲しいと思つ

「・・・応えられない」

「・・・」

「応えられないよ さつきの事だつて・・・どう理解していいのか

「俺は頭がおかしくなりそつだつ!!」

「俺の手でイッタ ただ それだけだ」

ぱしつ

宏の平手が大沢の頬を打つた

「即物的な 大沢・・・男の身体の構造上仕方ない結果だ!」

「気持ちや心がそうさせたワケじやないつ!!」

「俺は宏の心も欲しいと思つている」

「俺はお前を親友以上の何者とも思わないつ!」

「・・・」

「帰つてくれ」

「考えておいてくれ・・・今日は すまなかつた

俺も急ぎすぎた・・・まずは気持ちを伝えるべきだつた

「気持ち?」

「宏を好きな気持ちは本当だ 信じて欲しい」「・・・気の迷いだ・・・」

「本気だ」

「大沢・・・女を見ろ もつと もつと周りを見る  
お前の事を好きだという女子は山程いたじやないか」

「お前が・・・宏が好きだ」

「気の迷いだと・・・思う・・・」「

「・・・」「

「時間を・・・時間をくれないか・・・」「

「わかった」

大沢は ゆっくりと立ち上がり 脱ぎ捨ててあつた服を身につけた

「俺は本気だから・・・」

そう言い残して大沢は宏の部屋から出て行つた

この日を境に

大沢が宏の前に現れる事はなかつた

#### 新生活の4月

大学生活を始めるにあたつて 宏は引っ越しをした  
大学にほど近いアパートを借り キャンパスへはバイクで通つた  
母の病院にも近くなり 見舞いに訪れるのも楽になつた  
新しい友達もでき 宏は大沢の事を忘れた

いや

忘れようと心がけていた

つとめて考えないように毎日を過ごした

それでも ふと部屋で一人になつた時などに  
どうしてもあの日の事が蘇つた

携帯も変えた

新しい住所は誰にも知らせなかつた

携帯は鳴らない

ただ いつも耳に響く声があつた

「宏・・・俺は本気だから・・・・」

## 14・私ー新生活にて

### 14・私ー新生活にて

私は相変わらず実家で暮らしながら短大へ通い始めた  
一人暮らしも考えたが 経済的な事もあり諦めた  
そんな中 宏が引っ越ししたのを知った  
何も知られていなかつた

母がたまたま 小さな軽トラック一台で出て行こうとしていた  
宏に出てくわし 転居を知ったのだった  
宏は私たち家族にも行き先を教えないつもりだつたらしい  
しかし 入院中の母の事もあるではないか と  
私の母に説得され 宏はしぶしぶ転居先と連絡先を書き残したそだ  
のだ

短大から戻つてその話を聞いたとき

私は大いに驚き 少なからずショックを受けていた  
今まで どんな小さな事でも隠さず話してきた仲であり  
またこれからも ずっとそうでありつづけるものと思いこんでいた  
のだ

幼馴染み そんな響きは離れ離れになつて初めて切なく  
胸に留まる言葉なのかも知れない

宏のいない生活に 私は随分と戸惑い悩みもした  
しかし 7月の夏休みを迎える頃には新しい友人もでき  
それなりに毎日を過ごす事ができるようになつていた

そして夏のある日

友人と立ち寄ったコンビニで 何気なく手にとったファッショング誌に  
私の目は釘付けになつた

「優勝者はモデルデビュー」とうたわれた美少年コンテストらしい  
頁に

見紛う事のない姿があつた

宏だつた

大きなトロフィーを抱え はにかんだ笑顔で立つ宏の写真を  
私はしばらくの間絶句して凝視していた

そんな私に気づいた友人は陽気に言った

「ああ！寺山ヒロシ君優勝したんだねえ！やっぱりね  
私も彼に投票したもん！格好いいよね っていうか  
可愛くて ちょっとエロイ感じがいいんだよねえ～」

「・・・・・エロイ・・・・・・・・・・・・

私はしばらく 正常な思考回路へと立ち戻る事が出来なかつた

その後数ヶ月という短い期間のうちに

宏は男性誌・女性誌問わず あちこちでその姿をみかける程の  
人気モデルへとなつていた

表紙を飾る事も少なくなく 街中にはそのポスターさえしばしば見  
かけられた

風の便りによれば というのも芸能通の友人からの情報によれば  
寺山ヒロシこと 宏は某国立大学建築学部の現役大学生であり  
学業の傍らモデルとして生計をたててているらしい との事であつた  
友人は私が宏の知り合いで在ることは知らない  
屈託もなく 「格好良くて ちょっと影があるようなエロさが好き」  
という

こんなに人気が出てしまつた有名人に 今更連絡をとるのは  
どこかはばかられた

初めてモデルとしての宏を知ったあの日に  
久しぶりとメールのひとつでも送つていれば  
高校時代の続きをまた出来たかも知れない  
そんな後悔にも似た思いがよぎる

卒業して本当にバラバラになってしまった私たち  
離れてみて初めていかに自分が宏に依存して生きてきたのかを痛  
感した

幼馴染みもうそんな言葉では宏を繋ぎ止めておくことは出来ない  
のだ

漠然としたそんな思いに我ながらその喪失感の大きさに驚いた

そしてふと大沢少年の事を思い出した

彼はその後どうしているのだろう

卒業式の後私は二人の姿を捜して校舎の中を走り回った  
しかし二人を見つける事はできず

私はとぼとぼと一人で学校を後にしたのだった

それから宏にも大沢少年にも会つていない

二人はあの後どうしているのだろうか？まだ交流があるのだろうか

私は思い立つて大沢少年の携帯にメールをいた

久しぶりですその後どうしますか

短い文面に私は自分のアルバイト先である画廊の住所を記した

数日の後

大沢が私のバイト先である画廊を訪れた

大学は夏休みであり今年も随分と暑い夏となつていた

カラソと入り口についた小さな呼び鈴が鳴り

背の高い影がうつそりと画廊に入ってきた

飾り気のないTシャツにコットンのサマーパンツという出で立ちは一見地味のようであり実際には大沢の持つ鋭くどこか野性的な雰囲気を際だたせており とてもよく似合っていた

「久しぶり」 そう言つて静かに微笑んだ大沢は高校時代とはどこか少し違つて見えた  
何がそうさせているのか私には判らなかつたが私の知つている大沢はもつと朗らかな柔らかい笑顔の少年だつた今の大沢の笑顔は大人っぽくなつた という一言で片付けるにはどこかひつかかる 何かが違う 隠を帶びていた

「最近 宏に会つてゐる?」 私の問ひに大沢は首を横に振つた雑誌の事は大沢も本屋で見かけたといい 宏がモデルとして活躍し始めている事を知つていた  
また ああいつた華々しい世界に宏はそぐわない気がする  
と 少し心配しているような口調で言つた

「宏には会つていないが 宏のお母さんのお見舞いには時々行つて  
いる」

大沢は宏の母を見舞い いつか宏にも出くわす事があるかもしれない  
と秘かに願つてゐるのだと 面はゆううに言つた  
その表情は どこか苦しげにも見えた

大沢はまた 卒業式のあの日 宏から「女と付き合ふ」と言われた  
と私にぼそりぼそりと語つた

「それで・・・大沢君 お付き合ふしてみたの?」  
私の問いかけに頷いて応えた

「コンパで知り合つた女性が連絡してくれと言つのじしばらく  
お付き合いをしてみた」

性的な関係にも至つたのだとわらぬ口調で言つた

けれども それは自分にとつて 動物の雄としての機能が正常に働くと言つことの証明にしかならなかつたとも言つた

女性は可愛らしく 美しく 見てゐるのは楽しい  
手をつなげばあたたかいその手に癒されるし

抱き締めれば柔らかいその感触に心地よいとも感じた  
しかし どうにも恋する気持ちになれないのだという

かといつて

自分は本当に男にしか興味を持てない 真性のゲイなのかと不安に  
もなり

そのでのやからが集うであろう店に出向いてもみた  
そこで 数人の男に声をかけられもしたが  
これは全くと言つて何も感じるところもなく  
正直なところ そういうた関係を求める輩とただ会話をする事すら  
苦痛以外の何物でもなかつたといつ

結局の所

大沢は私の目をしつかりと見つめて呟いた

結局の所 やはり自分は寺山宏という人間だからこそ  
恋しくもあり 愛しくもあり くるおしく求めて病まないのだと氣  
づいたと

いつか

いつか宏と再会した時に その傍らに可愛らしい女性が佇んでいたら  
どうするの? そんな意地の悪い質問をしてみた

大沢は しばらく俯いて足元を見つめていたが  
顔をあげると きつぱりとした口調で応えた  
「それでも気持ちは変わらないと思つ」 と

## 15・寺山宏－知らない世界で

15・寺山宏－知らない世界で

大学に入つてしばらくした頃 ガールフレンドができた  
好きです つきあってください

そんなストレートな告白をされて 宏は彼女を受け入れた  
綺麗なロングヘアに黒く大きな瞳がクリクリと動く  
どこか小動物のような可愛らしい少女だった  
何も考えず 軽い気持ちでOKしていた

一緒に買い物をしたり 映画を見たり  
食事をしたり 大学内でも一緒に勉強をしたりもした  
ただ キスもセックスもしなかった  
そういう欲求が不思議とおこらないのだった

ガールフレンドは宏の外見をいつも褒め 大好きだと言つた  
自分の外側だけが好かれているのだろうと感じていた  
宏は自分が女生徒たちから人気があるのに反して  
陰で男子生徒たちから良く思われていらない事も感じていた  
高校時代には向けられた事のない視線がつらかった  
今更のように 幼馴染みと大沢と共にいた日々が懐かしく思えた  
守られていたのかな とも思えた

ガールフレンドは宏の写真に履歴書を添えて  
某雑誌でのオーディションに応募してしまった  
話がどんどんと進み 気がつけばモデルという仕事を始めていた

自分の存在が初めてプロのカメラマンによって切り取られ  
その姿が雑誌の誌面を飾った時

宏は不思議な思いに取り憑かれていた

意識した事もなかつた自分という生き物の外見が  
こんなふうに人の目には映つてゐるのかと愕然とした

ポーズを決める事も 自分で表情を作る事もできない  
素人の自分が ただそこに突つ立つてゐるだけの自分が  
こんな風にカメラマンの目には映つていたのか  
これを見る人達にとって 寺山ヒロシ という存在は  
この「写真が全てなのか  
空恐ろしい氣すらした

しかし 病床の母に雑誌を見せたら とても喜んだ  
その笑顔が嬉しくて 次の仕事も引き受けた  
そうこうするうちに なぜかひっぱりだこの人気モデルの仲間入り  
をしていた  
自分に自信はない その外見に拘りもなんの自覚もなかつた  
それなのに 周囲の人間たちはこぞつて自分の外側を褒める  
複雑な気分だつた

ガールフレンドの態度も変わつた

それまでの可愛らしい少女から 嫉妬深く疑い深い少女へと変貌した  
結局 夏休みの終わりには別れが訪れていた

残つたのは 彼女がきっかけを作つてくれたモデルの仕事だけだつた

離婚した父からの養育費や生活費は宏が大学に入学すると同時に途  
絶えていた  
もう成人したものと見なされたのか 先方にも経済的な理由がある  
のか

母も宏も何も知らされる事はなかつた

宏は 学費と生活保護だけではまかないきれないものを補うためにモデルの仕事をやめるワケにはいかなかつた

正直 普通のアルバイトや肉体労働のバイトをした方がもっと稼ぎはよかつたかもしれない それでも 宏にも何某の責任感が芽生えており

現場で必要とされればモデルとしてできひる限りの事をしたいと思うようになつていた

その日も 雑誌のグラビアの撮影にかり出されていた

本当は同じ事務所に所属する宏よりも年長のモデルが参加するハズだつたが

どういうワケかクライアントとカメラマンの強い希望により宏へとモデルが変更されていた

カメラマンは今 実力と人気ともに若手の頂点にたつ吉田という男だつた

吉田は自らも俳優あがりという異端の経験を持つカメラマンでありその精悍で端正なマスクでビジュアル的にも注目を集めている存在であつた

指定された撮影場所へと向かつた宏はそこがいつもの現場とは少し趣の違う場所である事にささやかな疑問を覚えた

それは 都内の高層マンションの一室であり

宏の他にモデルは一人もやつてきていなかつた  
室内にはカメラマンが一人で待ちかまえていた

「おはようございます 寺山ヒロシです よろしくお願ひします」

そつこつて頭を下げる部屋に入った宏をカメラマンが笑顔で迎えた  
「やあ ヒロシ君 初めまして 僕は今日撮影をさせてもうつ吉田  
です」

「よろしくお願ひします」

あらためて頭をさげた宏ひカメラマンの吉田はソファーをすすめた

「あの・・・マイクさんとか衣装さんたちスタッフのみなさんは・・・どちらに?」

宏の問いかけに 吉田はカメラの三脚をセットしながら答えた

「ああ・・・今日はね 僕が一人でさせてもらう事になつてるんだ」

「・・・お・・・お一人ですか?」

「ああ そう 僕一人で全部するから心配しないで」

「は・・・はい」

宏は落ち着かない気分でソファーに腰をおろした

高い天井いっぱいまでの大きなガラス窓の外には都心の大パノラマが広がっている

天気の良い空が青く目の前に迫つていた  
空中に ぱかりと浮いて取り残されたような気分になる  
ぽんやりと窓の外を眺めていた宏の肩に吉田の手がかかつた

「宏君 撮影の前にジュースでもどう?」

そういうて吉田は宏にグラスに注がれたオレンジ色の液体を勧めた

「あ・・・ありがとうございます」

宏はグラスを受け取ると 緊張で乾ききつていた喉に一気に流し込んだ

「くつくつく・・・美味しい?宏君」

吉田の顔が宏の目の前に迫つた

「・・・?なつ・・・なんですか?よ・・・吉田さん?」

「ちょっとだけ 時間がかかるつていつてたつけ くつくつく(笑)

「な・・・なんの時間・・・です・・・か・・・うつ・・・」

宏は自分の身体からがっくりと力が抜け落ちてゆくのを感じた

たまらない恐怖に襲われた

ソファーに座つていられなくなり 足元の毛足の長い絨毯に崩れ落ちた

「な・・・な・・にを・・俺に・・の・・飲ませ・・たつ・・」

「宏君 甘いなあ 君・・・」この世界のお約束 知らないの?」

「くつ・・・くそつ・・・な・・何が やく・・そく・・・」

「大体 撮影なのに一人つきりなんておかしいと思わなくちゃ この先 気をつけなくちゃだめだよ 君みたいな美人はいつも危険と 隣り合わせなんだから ちゃんと自覚を持つてやつて行かなくちゃ

くつくつく (笑) 「

「く・・・くそつ・・・」

吉田の手が宏の細い首筋にのびる

逃れようと身をよじるが身体が言つひとをきかない

助けて・・・助けて・・・誰か・・・

自分の身に何が起きよつとしているのか 漠然とした恐怖で思考が止まる

必死な宏の姿を吉田は楽しむよつに田を細めた

「キレイだね・・・寺山君・・・君の一番綺麗な姿を写真に撮つてあげるからね」

吉田の手が宏の上着のボタンをひとつずつ外し始めた

## 16・寺山宏一受難

朦朧とした意識の中 宏は自分が吉田に抱き上げられてどこかへ運ばれてゆくのを感じていた

先ほどまでいた明るい光に満たされたりビングとは違う  
厚いカーテンで閉ざされた薄暗い部屋

部屋にはキングサイズのベッドがひとつ  
どうりと宏はそのベッドの中央へと投げ込むよつて下ろされた

「本当に綺麗な顔をしてるね・・・ヒロシ君 顔だけじゃない  
整った体格に・・・きれいな筋肉がちゃんとついていて・・・肩から  
二の腕のラインがたまらなく魅力的だね」

「・・・・・や・・・・やだ・・・・やめ・・・・」

宏は自由にならない手足で必死にベッドの上から逃れよつともがいた  
そんな宏を楽しむように眺めていた吉田がゆつくりと  
ベッドの上にあがると宏に覆い被さるように身体を重ねてきた  
「桜色の唇・・・ふつくらとして ホントに素顔なの? 信じられない  
いな・・・」

吉田は指の腹で宏の柔らかい唇の輪郭をなぞる

吉田が着ていたシャツを脱ぎベッドの下へ落とす

30代後半のはずだが吉田の身体は見事にひきしまり

同性からみても惚れ惚れするような筋肉に覆われた裸体が露わにな  
つた

しかし この状況で田の当たりにしたそれは  
宏にとって恐怖以外の何物でもなく  
大きく見開いた宏の瞳にはうつすらと涙が滲んだ

「なつ・・・何を・・しようつていうんだつ　俺に・・・」

「美人を拉致してする事といつたら決まつてゐるだろ? (笑)」

「おつ・・・俺は男だしつ」

「美人は男も女も大好物なんだよ　僕はね」

「何言つて・・・つつ・・・か・・身体が・・・」

「うん? そろそろ効いてきた?」

「何が・・・効くつて・・・」

宏は喉がはりつくように声がかすれ　身体がひどく熱く汗ばんできた  
全身の血が沸点を迎えてしまつたような　かつかとした熱がたまらない

そしてそれは宏の下腹部へと堪えきれない熱を誘つてゆく  
自身の意志に反して疼くような震えがおこる

吉田はその宏の反応を楽しむよつてゆつて宏の衣服を剥がして  
ゆく

宏の抵抗は虚しく吉田の身体に押さえ込まれ

白く滑らかな肌が露わにされてゆく

吉田の唇が　苦しげに喘ぐ宏の唇を塞いだ

「んんつ・・・」

顔をそむけようともがく宏の小さな顎を掴み

吉田の口づけは一層深くなる

息苦しさに思わず喘いだ瞬間に　宏の口腔に吉田の舌が滑り込む  
絡め取られるように舌を弄ばれ息があがる  
のけぞった白いのじ仏に吉田は唇を這わせ  
そのまま宏の首筋に淡い紅色の跡を残した

「つ・・・」軽く鋭い痛みに宏の眉間に皺が寄る

そんな表情が男の欲情を益々煽るとは宏に知る由もなく  
逃れたい一心で自由の効かない身体をよじり続けていた

しかし 吉田の脣が胸元へと移り

宏の胸の珊瑚色の突起を捕らえた時

宏の口から悲鳴に似た声が漏れた

「・・・なつ・・なんで・・・」

意志に反して吉田の愛撫にいやといつまほじ感じてしまつ自分が  
信じられず また腹立たしく

おそらくはジユースに混ぜられていたであろう薬物の効果に背中が

冷えた

恐かった

自分が自分でなくなつてしまいそつで

吉田の手が身体中を這い回り 撫で回される程に口から漏れる  
自分のものとは思えない甘い吐息がたまらなかつた

「ヒロシ君・・・・声がいいから・・・啼かせがいがあるね・・・  
色氣にそくそくする」

吉田はヒロシの剥き出しの胸元から下腹部へと舌を這わせていった  
やんわりとその頭をもたげ始めていた宏のたかぶりを  
薄く柔らかい茂みの中から吉田は自らの掌へ包み込む  
びくりと宏の背中がはねる

抱き戻すようにその細い腰を抱え込むと

吉田は宏の昂ぶりをその口に含み 淫猥な音を響かせた

「ひやあつ・・・・あつあつ・・・」

薬物のために敏感になりすぎている箇所を執拗に責めあげられ  
宏は全身を震わせて啼いた

吉田の指先が宏のつまましくその入り口を閉ざした  
蓄へと伸びると 宏の恐怖は頂点に達した

「やだつ・・・・やめて・・・やめてくれ・・・いやだつ・・・」

宏の懇願を鼻で笑い飛ばすと吉田はかまわず指先で薔薇をこじ開けてゆく

「綺麗なピンク色だ・・・もしかして 初めてなの？」

「あ・・・当たり前だつーだれが・・・こんな・・・」

「君ほどの美人だつたらもう誰かに食べられちゃつてるかと思つてたよ

これは思いがけない収穫だなあ 大丈夫 優しくするよ 安心して」  
吉田はそう言つて 宏の薔薇に口づけるとその舌先で入り口を解し始めた

「やあああつ・・・つんんつ・・・」

強すぎる刺激が宏の全身を襲い 悔しさと恐怖に涙が零れた

大沢・・・ふと自分がその名に助けを求めている事に宏は気づいた  
助けて・・・大沢・・・

首を左右にうちふり 亂れた前髪が宏の額に散つた

膝を割られ 内腿を大きく開いた形で押さえ込まれたまま  
宏は吉田の愛撫から逃れようと必死にもがいていた  
しかし一方で 抗えない快感が宏を包み始めていた  
こんなのイヤだ・・・力と薬で押さえ込まれるなんて

吉田への怒りというよりも

宏自身が自分を許せない怒りだつた

こんな状況を招き入れてしまつた自分の無防備さに腹がたつた  
怒りにまかせて渾身の力をこめて足を蹴り上げた

宏の膝と足先が続けざまに吉田の鼻がしらを強打した

「うつ・・・ぐつ・・・」

たまらずつずくまつた吉田をふらつく身体でベッドから突き落とした  
ようよると起き上がつた宏はおぼつかない足取りでベッドの周りに  
散らばつた

自分の衣類をかき集め 急いで身につけた

恐怖と薬のせいで 震える指先が思うように動かない

もどかしくシャツのボタンも全部はかけきれず かまわざ上着を羽織つた

「い・・・」のつゝー新入りの世間知らずがつーこんな事をして

ただで済むと思うのかつー！

顔を覆いながら絶叫する吉田には田もくれず

宏は必死で部屋をでた

身体は自由がきかず 震える手でエレベーターのボタンを押す

背後から今にも吉田が追つて迫つてきやうど

恐怖に涙がとまらなかつた

吉田は追つてはこなかつた

プライドの高い吉田は惨めな姿で宏に追いすがる事をよしと  
しなかつたらしい これは宏にとつて幸いであつた

宏はふらつく足でなんとか大通りまで出ると通りかかつたタクシー  
に転がり込んだ

不思議そうに涙に濡れた宏の顔をみやる運転手に

宏は行き先を告げた

大沢に会いたい

ただひたすらに そう念じていた

## 16・寺山宏一受難（後書き）

「」感想・コメントなど頂戴できまると  
今後の励みになります よろしくお願い致しますう

## 17・大沢たかし 一再会

17・大沢たかし - 再会

その頃 大沢は不思議な胸騒ぎを覚えていた  
何かざわざわと落ち着かない気分になり

一人大学のレポートに取り組んでいた部屋の窓から外を眺めていた  
大学入学と同時に入居した一人暮らしのマンションは  
狭いながらも快適に整えられ 好きで選んだ家具で揃えられていた  
居心地の良いはずの部屋の中で

何が落ち着かない原因なのか 首をかしげた時

大沢の携帯が鳴った

着信番号に見覚えはなかった しかし迫る胸騒ぎに

慌てて電話に出ると声がうわずつた「て・・寺山? 宏か?」

大沢の声に 電話の向こうからはかすれた声がした

「お・・・大沢・・・助けて・・俺・・俺・・どうしたら・・・」

「宏? 宏? 今どこにいるんだ?」

「おまえんちに行こうとしたのに・・・お前・・・いない・・・」

「一人暮らしをはじめたんだ 実家にはいない 僕の家に行つたのか?」

今はどこにいるんだ? そこを動くなよ すぐ行くからッ!」

大沢は携帯と財布 家の鍵だけを掴みポケットにねじ込むと  
部屋を飛び出した

行き先は実家の近くのコンビニ 宏が電話をかけてきた場所だ  
バイクを飛ばして10分程でたどりついたコンビニの  
駐車場の片隅に うすくまつて いる宏を見つけた

「宏つ! -!」

「おおさわあ・・・・・・・」

「何も言わなくていい・・・行こう歩けるか?」

「うん・・・」

「バイクの後ろ 乗れるか?ほんの10分 我慢できるか?」

「うん・・・」

おとなしく大沢に即されるままに宏はバイクの後部座席に跨った  
「しつかりつかまつてろよ」

「うん・・・」

宏にヘルメットを被せると 自分はノーヘルのままバイクを発進させた  
大通りを避けて住宅街を抜けながら なるべく静かにバイクを走らせた

宏が弱っているらしいことはその姿を見つけた時に判った  
ただ その理由は見当もつかなかつた

しかし今はとにかく 大沢は宏を自分の部屋へと連れて帰りたかつた  
何かに追い立たれるように  
何かから必死に逃れるように

大沢はバイクを走らせた

その背中から両腕を深く大沢の腰にまわし ヘルメット越しにその  
顔を

大沢の背中にすりつけるようにしがみついた宏は目を閉じていた

目を閉じてバイクに揺られるのは恐い

しかし 宏は今 大沢の背中のぬくもりに全ての神経を注いでいた  
そうしないと疼く身体がバイクから振り落とされそうで  
また すぐそばに まだ吉田の荒い息づかいが聞こえるようで  
宏はきつく目を閉じて 先ほどまでの全てを脳裏から追い出そうと  
していた

大沢に抱き取られるようにしてバイクを降りた時

宏は繫ぎ止めていた意識を手放した

ふらりと氣を失つて大沢の胸に倒れ込んだ

「宏つ！…」

大沢は気を失つた宏を抱き上げると 部屋へと運び入れた  
ヘルメットをとり 靴を脱がせ

宏をベッドの上に横たえた

苦しいかとゆるめたシャツの襟元から 宏の白いうなじにくつきり  
と刻まれた

薄紅色の痣が見えた

「・・・！・・・」

それが何を意味するのか 大沢は瞬時に理解した  
大きくため息をつくと 大沢は宏の肩口まで掛け布団を引き上げた  
冷たい濡れタオルを宏の額にのせてやり  
その手を握つたままベッドの傍らに座り込んで付き添つた

長い睫が白い顔にくつきりと陰を落とし

閉じた瞼は泣きはらしたように紅く染まつてい

何を堪えて噛み締めたのか 宏の唇の端が小さく切れて血が滲んで  
いた

何があつたのだろうか

どうして自分の所へ宏はやつてきたのだろうか  
助けて

確かに宏はそう言つた

何から逃れてきたのだろうか

知りたいという激しい欲求のすぐ傍らで 何も知りたくないと叫ぶ

自分がいた

大沢は ただ宏の白い寝顔を見つめていた

## 17・大沢たかし 一再会（後書き）

評価・コメント・感想など  
頂けますと今後の励みになります  
よろしくお願ひいたします

## 18・寺山宏・帰る場所

その夜 宏は額に汗を滲ませ 小さくつなされ続けていた  
宏の身体は小さく震え 「つわ」とのよつに「いやだ」と「やめて」  
を繰り返し

その合間に自分の名前が呟かれた「大沢・・・助けて」と  
宏が自分を頼つて何者かの手から逃れてきた事は想像に容易かつた  
しかし それがどういう経緯であつたのか  
また どんな状況であつたのかは全く判らない  
大沢は眠る宏の傍らに腰をおろし 一晩中一睡もせずに付き添つて  
いた

明け方 ついうとうととまどろみかけた一瞬に

仄暗い朝靄と薄白い夜明けの中で夢を見た

天使のような微笑みをたたえた宏が両手を広げて大沢を抱き締める  
そんな夢だった 夢の中で宏は眩いばかりの光に包まれていた  
そして自分は漆黒の闇色の羽根に包まれていた

闇色の羽根は宏の身体に触れると崩れるように散り散りに砕けて消  
えていった

自分もまた 宏に触れた時 ちりぢりに消えてゆくのだろうと思った  
夢の中 それでも自分は宏に触れずにはいられない  
触れたら最期 崩れてこの世から儚く消え去るのだ そう感じてい  
ても  
その身体を抱き締めずにはいられなかつた

誰もこの存在を 宏を汚すことはできない  
この神々しい程に美しく儚い存在に何者も触れてはならないのだ

そんな啓示を見た気がした

目覚めて尚 大沢の心には 強くこの夢の残像が焼き付いていた  
宏を傷つける者は何人たりとも許さない

俺が守つてみせる

その為に 塵と果てようとも何の後悔があるだろう  
宏を弱らせここまで怯えさせた相手が許せなかつた

気づけば

宏の寝顔を見つめながら 大沢はきつく爪が食い込む程に  
自分の両手を握りしめていた

この拳は誰に向かつて振りおろされるべきものなのか  
宏から聞き出して自分はそいつを殴りに行くのだろうか  
そいつのしたことを宏の口から聞きたいと  
自分は本当に望んでいるのだろうか？

「つくそつ・・・・・」

思わず小さな悪態が零れた

その声に気づいたのか

宏がゆっくりとその大きな瞳を開いた

何度も静かに瞬きをした後 宏の瞳は大沢の姿を捕らえた

「・・・大沢・・・ここは・・・どこ？俺・・・」

「身体は大丈夫か？どこか痛む所はないか？気分は・・・どうだ」

「・・・俺・・・」

「・・・宏？」

宏の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた

それを拭おうともせず 宏はただ嗚咽を堪えながら涙を流し続けた

大沢は ただそんな宏を見つめていた

しばらくして 少し宏が落ち着いてきたところで

大沢は優しく宏の背中を2回ポンポンと軽く叩き 部屋を出て行つた

間もなく 大きなマグカップを持つて部屋に戻ってきた大沢は宏にそれをそつと差し出した

「暖かいカフェオレだから・・・飲むといい」

「・・・・・ありがとう・・・」

素直に受け取り それに口をつける

「甘い」

「イヤな事があつた時や疲れた時は甘いものに限る」

「・・・・うん・・・・」

「ぐりと頷くと 宏はマグカップにカフェオレをゆっくりと飲んだ

「何も・・・何も聞かないんだな 大沢・・・」

「・・・・話したくなつたら話せばいい」

「今は・・・話したくない」

「だつたら それでいい」

「・・・うん」

「雑誌で見かけた 忙しそうだな」

「・・・うん 自分でも意外だつたんだ こんなになるなんて・・・」

「彼女も心配してたよ・・・宏に向いてる世界なのか・・どうかって」

「幼馴染みつて 離れてみると肉親みたいなもんだったんだなあって俺も最近になつて彼女に連絡しなくちゃつて思つてたところだ」

「画廊でバイトをしている」

「そうか・・・好きな絵に囲まれてるってことだね」

「お前が黙つていなくなつたのがかなりショックだつたと言つていた」

「・・・悪かつたと思つてゐる」

「俺のせいだよな・・・」

「・・・大沢」

「でも 今でも俺の気持ちに変わりはない それだけは変わらない  
・・・大沢」

宏はその後 大沢と近所のラーメン屋で食事を共にして帰つて行つた  
無理に引き留める事はしなかつた

何があつたのかも聞かなかつた

次にいつ会えるのか そんな話もしなかつた

大沢はただ 宏が自分を頼つてやつてきてくれた事だけでよかつた  
何かあつたらまた連絡をしてくる

きっと 宏はまた元のように俺や彼女の元に戻つてくる

大沢はそう信じていた

そしてまた 自分の心も変わることなく宏を待ち続けると

## 19・私・気づかずについた事

### 19・私・気づかずについたこと

大沢が画廊にやつてきた

昨晩 宏が訪ねてきたという

詳しい様子を話そとしない大沢だつたが  
それならなぜ私をわざわざ訪ねてきたのかと問えば  
いつか 君の所へも宏が助けを求めてくるかもしれないから  
その時には暖かく迎えてやつて欲しい という  
当たり前だ 言われなくてもそうする と応えると  
安心したように微笑んで帰つて行つた

宏に何があつたのか 私は知る術もない

大沢もまた実のところ 何も知つてはいないのだと思つた  
しかし 大沢の胸に宿る激しい怒りが手に取るように伝わつた  
おそらくは宏を傷つけた誰かを大沢は殺したい程憎んでいる  
それでも 宏からそれが誰なのか

一体何があつたのかを聞き出そうとはしない大沢

知らずにいる優しさもあるのだろうと思つた

大沢は 全てを受け止める覚悟を決めたのだろう  
そして私にも同様の優しさを持ち続けてくれと言いにきた

優しさ?

私の胸の中にある思いはそんな綺麗なものじゃない

私は大沢に淡い恋心を抱いていた

そしてその大沢が恋する宏をも 私は愛しく思つていた

そう

私は二人に恋して病まないのだ  
二人の少年 今はもう立派な青年になった一人が  
私の理想型であり 憧れであった  
だから

私は一人を失いたくなく  
二人を誰にも渡したくないのだ

それは醜い独占欲

はてしない執着心は私の心を暗く濁す

そのどちらをも選ぶ事もできなければ  
おそらく

私が彼らのどちらかに選ばれる事もないのだろう  
だから それならばいつそのこと

私は一人が上手くいけばいい そう思つた  
そうすれば 二人を誰かに奪われる事もなく  
私は変わらず彼らの側にいられる

屈折した私の想い これも一つの恋の形

大沢の心の闇を覗いた時 自分の闇にも気がついた  
恋に正解などないのだから

私の恋もまた一つの形

大沢にも宏にも 告げる事のない私の想い

私はいつか 一人とは違う誰かと家庭を築き子をもうけ  
ごく普通の生活に幸せを見出してゆくだろう  
そうする事で 絶対に叶う事のない恋を忘れていくのだ  
そうしながら

きっと 死ぬまで私の心の片隅には

大沢と宏という二人の少年が住み続ける

手を伸ばせば届く距離にいるのに 絶対に届かない彼ら  
二人の間にはどの位の距離があるのだろうか  
大沢が高校の3年間をかけて出した結論に  
宏はどう応えてゆくのだろう

私にできる事は これからもずっと  
二人を見守つてゆくこと  
それは 私の屈折した恋心と純粹な好奇心  
いや 醜いあがきなのかもしれない

季節はめぐり 短大と言つところは入学した年と卒業する年しかない  
よつて 私は追い立てられるように就職活動をして  
とある企業の広告デザインの仕事にありついた

宏の姿は相変わらず数々の雑誌でみかけ  
最近ではテレビのCMも数本みかけるようになつた  
そんな宏の姿は どこか現実感に乏しく  
自分のよく知る宏とは別人のように思えてならなかつた  
宏が私に助けを求めてやつてくる事もなく  
何事もなく 平和に ただ流れて時間が過ぎていつた

## 20・寺山宏・田指すもの

20・寺山宏・田指すもの

大沢は何もきかなかつた

宏がボロボロの姿で泣きすがり 助けを求めたあの夜  
大沢はただ静かに宏に付き添い その背中を叩いてくれた  
小さな子供にするように 頭をくしゅくしゅと撫でられた  
それだけだつた

それでも 宏は吉田から受けた恐怖を払い除け 己を取り戻す事が  
できた

頼れるもの 帰れる場所がある事の幸せを実感した  
自分の外側ではない内面を認めてくれる者のいる安心感に浸つた  
また半面

自分がこのままでは『えられるばかりで  
何も『えられるものがないのでは といつ焦燥感を覚えた

大沢という男は高校生の頃から随分と落ち着いた男だつた  
それが 今では更に

自分の生き様に搖るぎのない自信に満ちた男になつていた  
その懐の深さに甘えそうになつた自分が情けなかつた  
大沢が何も尋ねずにすませてくれた事に感謝しつつ  
不甲斐なかつた自分を恥じた

変わらなくては

逃げてばかりでは何も始まらない 何も変わらない  
宏ははじめて自分が見て見ぬふりをし続けてきたものに  
直面しようと覚悟を決めた

それからの宏は モデルという仕事に拘りを捨てた  
自分の外見が求められるのならそれでよいと割り切る事ができるようになつた

そうなつてみると 現場ごとに求められるキャラクターが見えてくる  
時には挑戦的な視線の青年にもなり  
時には無邪気に微笑む無垢な少年のようにもなれた  
そんな宏の変化に周囲は驚きつつも対応は暖かかつた

それまで冷たく遠く取り巻いていた同性のモデルたちも  
宏の仕事への取り組みが変わった事でその付き合い方を変えてきた  
仲間として認められ 宏は居場所を見つけた

本当の自分を知つていてくれる人が一人でもいればそれでよい  
そう思えるようになつた

雑誌やポスターでの自分を見て 自分の全てを知る人などいない  
だからこそ その虚構の世界の自分は自分で演じればいい  
そう思えるようになつた

大沢という存在が宏の内面に大いなる影響を与えていた

気負わず 構えず 嘘をつかず

宏はただ自然体で仕事に臨んだ

内面までさらすことはない ただ求められる「寺山ヒロシ」 であればいい

そんな宏はひつぱりだこの 押しも押されぬ人気モデルとなつていつた

ある日の撮影で 宏はあの吉田カメラマンと再会した  
二度と会いたくないと思っていた相手ではあったが  
宏は笑顔で挨拶を交わすことができた

そして自分の肩に伸ばされた吉田の手をせりとがわす事もできた

「次はもう自由にできるなんて思わないで下さい」

艶然と微笑みながら吉田を睨め付けた

「・・・肝に銘じておくよ 次からはもうと正攻法で君を口説く事にする」

吉田もまた宏の変化に気づいていた

宏はがむしゃらに毎日を過ごした

大学の講義には休まず出席し 完璧なレポートを作成した

そして 休む間もなくまたスケジュールでモデルの仕事をこなしていった

母の入院費と自分の学費のために 馬車馬のように働いた  
モデルの仕事の合間には少ない時間をさいて建設現場で  
夜間に肉体労働のバイトもした

そんな無理はそうそう続けられるはずもなく  
宏は秋口の涼しい風が吹く頃に体調を崩した  
一人アパートで天井を見上げ 熱にうなされながら携帯をとつた  
素直に助けを呼べよ

そんな大沢の声が聞こえた

「・・・もしもし・・・俺・・・宏です 悪い 体調崩した・・・」

「家か? 何か食えるものを届けてやる 待つて!」

大沢は連絡もせずに過ごした数ヶ月について何一つ言つ事もなく  
あたりまえのようにそう言うと電話を切つた  
そして 2時間もしないうちに 大沢は宏の幼馴染みを伴つて  
宏の部屋へとやってきた

「宏・・・熱あるの? 大丈夫? 無理しそうなんじゃないのあつ!」

!」

彼女もまた、かれこれ1年以上も顔を合わせていなかつたのに  
そんなことには一言もふれず、まるでつり昨日まで高校で  
仲良く同級生をしていたそのままのよつに宏のおでこに手をあてた  
宏は布団にくるまりながら、くすぐつたこよつな幸せに浸つていて

大沢と彼女は狭い宏の部屋の中であれやこれやと宏の世話をやいた  
彼女はお粥を作り、いくつかの総菜をタッパにつめ冷蔵庫に収めた  
「適当に暖めて食べてね、何かあつたら母さんもいるから言ってね」  
また、宏の耳元にこつそりと囁いた

「素直に正直になるんだよ、幸せって近くにありますぎると気づか  
いものだから

私も気づいたのは最近だけね」

そういうと、宏にバイバイと手をふつて帰つて行つた

「大沢も、忙しかつたんだろ、悪かつたな、サンキュー」

「いや・・・具合の悪い時はお互い様だろ」

「でも、お前が具合悪くなるなんてなさそうだよな」

「そうだな、健康だけが取り柄だ」

「そんなことを言つてるんじやないけど・・・お前は自己管理がで  
きてるつて事」

「お前は頑張りすぎただけだ、自己管理はよくできてると思つ」

「・・・ありがとう・・・」

「いや」

ぼそりぼそりとしゃべる大沢の朴訥さがありがたかつた  
高校時代と変わらぬ居心地の良さに宏の臉は重くなつた  
すうすうと寝息を立て始めた宏をしばらく見つめた後  
宏が治るまで泊まり込むと宣言していた大沢もまた  
ベッドの下に薄いマットを敷き毛布にくるまつた

3日目には宏は食事も十分とれるようになつた  
大沢は宏のレポートなど大学の提出物を手伝い  
自らも持参した参考書と格闘しながら宏の部屋で過ごしていた  
お互い 何を話す訳でもなく  
それぞれに好きな事をして過ごす時間が心地よかつた  
一度失つて初めて知つた大切な時間だと思つた  
素直になろう そう宏は思つていた

宏の体調がすっかり元に戻り もう一人でも大丈夫だという事になり  
大沢が帰り際 宏に言つた

「・・・助けを呼んでくれて嬉しかった」と

それを聞いた宏は自分でも思いもよらない行動にでた

大沢の唇に そつと 自分の唇を重ねたのだ

「・・・！・・・」

驚いたように目を見開いたままの大沢に 照れくさそうに宏は笑つた

そしてもう一度 少しゆっくりと唇を重ねた

抱き合う事もない ただ唇を軽く重ねただけのキスだつた

「俺の方こそ ありがとう」

「・・・おうつ・・・」

大沢は小さく頷くとそのまま部屋を出て行つた

宏の胸の中にはんわかと暖かいものが溢れていた

## 21・寺山宏・素直になつて 手をとつて

21・寺山宏・素直になつて 手をとつて

素直になれた そう思つていたのに  
ようやく その差し伸べられた手をとつて その思いに素直に応え  
られると思つたのに  
神様は俺に今まで自分の心を偽り続けてきた罰を下したのか?  
まだまだ苦しめといふのか 悩めといふのか そして俺から全てを  
奪うのか?

大沢が病院へ運ばれた

大学3年の夏だった

頭を強く打つており 意識不明の重体だった  
バイクに乗つた大沢の前を犬を追いかけた少女が横切つたのだ  
少女を避けて大沢は転倒した 大学へ向かう途中だった  
運ばれた病院で 大沢は手術を受けた  
幸い 命は取り留めたが意識は戻らなかつた

知らせを聞いて 宏は病院へと駆け付けた  
ガラス越しに見える大沢は包帯だらけでいくつものチューブに繋がれ  
まるで映画に出てくるモンスターのようだつた  
涙で曇る大沢の姿を 宏はただガラスに額を押しつけて見つめていた  
集中治療室を出るのに1ヶ月を要した  
その後 一般病棟に映つてからも 大沢の意識は戻らないままだつた

大沢の入院後 宏は自分の母と大沢の二つの病院へ通い続けた  
社会人になつた幼馴染みの彼女もまた二つの病院をしばしば訪れた  
大沢が運ばれてから10ヶ月以上が過ぎようとしていた

季節はめぐり 再び暑い夏が訪れようとしていた

「大沢君 顔色もよくて よく眠つてるつて感じよね・・・」「ああ・・・先生も どうして意識が戻らないのか判らないって言つてた」

「何かきっかけがあれば・・・帰つてくれるのかしらね・・・」

大沢君

「・・・うん・・・」

「宏は就職どうするの?もう4年の夏なのに」

「うん・・・建築士の資格は取つたんだ なんとか・・・でも就職活動はすっかり出遅れちゃつたからね・・・このまま今の事務所で

モデルの仕事をしていこうかと思つてるんだ」

「そうなの?」

「うん・・・最近 結構コンスタントに仕事も入るし CMとかの大きな仕事も任せてももらえるようにもなつてきたしね面白くもなつてきたんだ 正直さ 最初はなんだかなあ・・・つて思つてたんだけど

大沢に背中押してもらつたからかな・・・」

「大沢君に?」

「うん 事故の前にさ 会つたときに言われたんだ

お前がお前らしくいられる場所があるならそれが一番だな つて

「宏らしく・・・いられる場所?」

「うん・・・俺 自分の外見つてあんまり好きじゃなかつたつてい  
うか  
あんまり意識した事なかつたんだ でも それを好きつて言つてくれる人がいて

俺が表現したものが何か人に伝えられたりするつて凄いなつて

単純にそんな仕事 なかなかないしなあつてさ

できる限りやつてみようかと思うようになつたんだ」

「そ、う・・・・ 応援するね きつと大沢君もそつ思つてゐるよ

「うん・・・ だといいな」

「早く 田を覚ましてくれるといいな」

「うん・・・ きつと きつと ああよく寝たつてケロッと起きるよ

・ きつと

「そ、うだね・・・

二人 そう言い合つて そ、う信じたいといつ氣持ちを肯定し合つた

眠り続ける大沢と二人つきりになると 宏は大沢の手をとりその指の爪を切つた

「こうして お前の爪切るの すっかり習慣になつちゃつたな・・・  
ホントはお前が俺の爪切つてくれるつて言つてたのにな・・・・」

窓の外では セミが夏の終わりに最期の声を振り絞つっていた

大沢の声がききたかつた

その手で背中を叩いて欲しかつた

その腕で抱き締めて欲しかつた

今なら判る 自分の正直な気持ち

素直になれる

宏は大沢を必要だと感じていた そして誰よりも愛していると

## 22・寺山宏・田覚め

22・寺山宏・田覚め

「寺山君 たまには付き合いでよお～ いつも付き合い悪すぎい～」

「～めんね 行かなくちゃいけない用事があつて また誘つてね」

「いつもそういう言つて断るぢやあ～ん どこ行つてるの? いつもお

「お～ 残念ながらみんなで楽しく行けるよつた所じゃないんだ」

「えええ～つえつ～ど～お～?」

「病院」

「どこか悪いの? 寺山君」

「いや 友人がずつと入院してゐるから見舞いに行くんだ」

「友だちい～? 恋人なんぢやないの?」

「そうだね そうかもしけないね それじやまた セヨウナリ」

「えええ～つえつ」

モデル仲間の甲高い声から逃れるよつて 宏はスタジオを後にした  
玄関を出よつとした時 不意に背後から肘を掴まれた

突然の事にぎょつとした拍子に小さな悲鳴をあげてしまった

「ひえつ?...」

「ははは(笑) 妙な声ださないでよ寺山クン 何急いでるの?

送つていこ～か?僕 車なんだけど」

「・・・・・結構です」

声の主は撮影を終えた吉田だつた

「つれないなあ・・・・運転手にならつて下手に出でるの?」

「お気持ちだけありがたく頂戴しておきます」

「冗談ぬきにさ 送つていいくよ 雨が降つてきたみたいだよ」

「えつ？」

「傘持つてないんじょ？遠慮しないで　ああ　何もしゃしないつて」

「・・・・・結構です」

「頑固だなあ・・寺山クンは・・本当に前回の事は反省したつてもうあんなマネはしないよ　だからこつしてちゃんと真面目にお誘いしてのになあ～」

軽い口調の吉田はどこまでが本当でどこからが冗談なのか判らない宏は結局　スタジオの玄関で　外が本当にひどい雷雨で在ることを知り

大人げなく濡れてゆくのもどうかと思いつどどまり

吉田の大きな4WDの助手席におさまった

「病院へ行くんじょ？寺山クン」

「！どうしてそれを？」

「さつき自分で言つてたじやない　女の子たちに

それに　調べたんだ　君の大切な友人が意識不明のまま入院してりんだつてね」

「・・・・ええ」

「恋人じやないかつて　さつき話してたよね？」

「・・・・ええ」

「そう・・・・へえ」　大沢たかし　つて男の名前だけど

「なつ！・・・どこまで調べたんですかつ？」

「君の事なら何でも全部調べたよ　僕は案外しつこいタチでね一度狙つた美人は落とすまで粘るんだ（笑）」

「・・・・・・・・・・・」

「なあ～んてね　半分本気で半分冗句だから気にしないで

君がさ　最近変わつたなあつて思つて　何が理由なんだろう？つて気になつていろいろ調べちゃつたんだ　ごめんね

で　親友が植物人間になつちゃつて　一人健気に頑張つてるつてト

「？」

なんか誘われちゃうねえ、僕は何か力になりたいだけなんだ  
ど？」

「…………」

宏は吉田の車に乗った事を悔やんでいた

信頼したのが間違いだつた

そもそも あんな卑劣な手を使つて自分を抱こうとした男だ

そんなに簡単に紳士になるワケがない

そう気づいた時には既に車は見知らぬ道筋を辿り始めていた

「吉田さんッ！僕は駅まで結構ですから もう下ろして下さい  
「送つていいくつていつただろ？おとなしく乗つてなさい」  
「どこへ行こうっていうんですかっ！病院でも駅でもない方角に向  
かつてゐるっ！」

「へえ、方向感覚いいんだね そ 僕の家に向かつてゐる」

「なつ・・・・・下ろして下さい 下ろせよっ！車を止めろっ！！」

「そんなに警戒しないでよ・・・・・こないだみたいにマネはしない  
よ・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「ただし 暴れられたりしたら困るなあ、どんな運転になつちゃ  
うか知らないよ」

「・・・・・つちくしょうつ・・・・」

「寺山クンでひあ 黙つてる時と口聞いたときの印象違うよね く  
つくつく

なんかおとなしさーーな美人なのに 中身は案外タフな野郎だった  
りしてぞ

そんなアンバランスな所も魅力だよね

押し倒して ねじ伏せてみたくなる くつくづく（笑）」

「あんた・・・おかしいよ・・・ビックリしてる

「君の毒にあてられて狂ったんだよきっと（笑）だから責任とって

もらわなくちゃ」

「うな・・なにを言ひて

「とにかく今はおとなしくしている方が良い

君だつてそんなに

バカじやなかうひつ」

「・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・

「え？」

「ゆつくり 君と話がしたいだけだよ・・・」これは本当だ 信じて

欲しい

「そ・・・そんなこと信じられるワケないでしよう・・・

「君はさ・・・高嶺の花つていうか ガードも固くなつちやつたし  
こんな方法でお姫様を攫つみみたいなマネして「めんね・・・」

「・・・・・・・・・

吉田はそれつきつ口をきかなかつた

宏もまた 口をつぐんだまま おとなしく助手席に収まつていた  
車は静かに走り続け 間もなく瀟洒なマンションの前に止まつた

「着いた・・・妙なマネはしないと約束するよ だから  
コーヒーだけでも飲んで行つてくれないか？後でちゃんと

本当に病院まで送り届けるから・・・・・

吉田の声は神妙で、先ほどのどこかふざけたような軽い雰囲気は払拭されていた

宏はその吉田の様子に、警戒をとかないまま素直に従う事にした  
部屋へと促され、宏は吉田についてマンションへ入った  
部屋はモード一ーンの都会的なインテリアで統一され  
あまり生活感のない、いかにも独身男性の一人暮らしな様子であった  
「座つて・・・コーヒーいれるから」

吉田の指示したソファーに、宏は腰をおろした

どうしても前回、吉田に薬を飲ませられて襲われかけた都心のマンションと

この吉田の部屋の内装が重なつて見えてしまい  
宏は落ち着かず、固い気持ちをほぐせずにいた  
そんな宏を知つてから知らずか

コーヒーメーカーの準備をしながら、吉田は柔らかな声で宏に話しかける

「寺山クン、入院してる友だちつて高校からの同級生なんだってね」

「・・・・そんな事まで調べたんですか」

「ああ・・・君の事、何でも知りたくてね、可笑しいだろいい大人がさ

アイドルのおっかけみたいに君の事知りたくて

君の事務所の子とか、モデル仲間とかにきいて廻つてや」

吉田は振り向くと、照れたような小さな笑みを見せた

その顔はどこか居心地が悪そうで

いたずらを叱られた小さな子供のようだと宏は思った

「・・・・・吉田・・・さん・・・」

「僕はセ いつも結構軽い奴を気取つてゐるだろ?だから  
周りもそのつもりで付き合つてくる奴らばっかりでね  
そんな中で 君は随分かわつた子だなあつて・・・・・気になつてた  
んだ」

「・・・・・かわつた?」

「うん・・・なんだかね モデルなんてやつてゐる奴らはセ  
みんな皿几[皿]顛[顛]示欲の塊つていうか 自分が大好きな奴らばっかりな  
んだ

それなのに 君と来たら自分の事なんてまるで判つてないつていうか  
どう見られるとかどう見えるなんて事に全く無関心みたいで「

「・・・・・そんな・・・・」

「新鮮だつた でもそれも君のスタイルみたいなもので  
そんなキャラを氣取つてゐるのかなとかうがつてみたりして  
結局のところ イマドキの軽いちゃらけた若者なんじやないかつて  
手に入れたいつて 無茶してもいいとか思つてしまつたんだよね」

「・・・・・・・・・」

「申し訳なかつた・・・・・本当に 後悔してゐる 君は本当に純粋なだ  
けだつたのに」

「・・・・・・・・・」

「君の事調べて いろいろ知つて本当に後悔した  
謝りたいと思いながら時間ばかり過ぎてしまつた」

「・・・・・・もう・・・・もう ここですよ」

「優しいな君は 益々惚れちやうよ ははは(笑)  
最近はね ちょっと心配してたんだ 君のこと」

「心配・・・・ですか?」

「ああ・・・・なんか ムキになつて仕事してゐるつていうか

今まで以上に自然体なんだけど それがどこか痛々しくてたまらな  
かつた

モデルの仕事は 楽しいかい?」

「・・・ええ・・・それなりに・・・最近は」「そうか 確かにいい表情やポージングが決まるようになってきたよな

でも 本当に自分で表現したい事 できると思つ?」「

「・・・表現・・・」

「モデルなんて ただ洋服や商品を見せるためのマネキン なんて そんな風に思つてたら間違いだと僕は思つ

モデルの魅力があつて初めて 初めて その商品の魅力も輝くんじゃないかな・・・」

「モデルの魅力・・・」

「君はとても魅力的な人だ でも君は誰の事も見ていない ただ一人の誰かにむかつて生きている そうだろ?」「

「・・・・・・・」

「きっと それがその病院で君を待つている彼なんだろ?」「

「・・・・・それが・・・・それは いけない事ですか?」「

「いけないさ」

「なつ・・・・・」

「モデルがカメラをみないでどうする カメラの向こうに何千何万の 人の目を意識しないでどうしていい表現ができるつていうんだ」「人の・・・目」

「君は今 その持つて生まれた恵まれた容姿と新鮮な存在感で売れてる ただ そんなものはすぐにみんなが慣れてしまうんだ ありがたみももの珍しさもなくなつた時 君は忘れられる」「

「・・・・・・・・」

「僕は君にそんなモデルで終わつて欲しくないんだ」「

「・・・吉田さん・・・」

「君を抱きたいって今でも思つてるよ(笑)死ぬほど欲しい 今だつて 押し倒したくてフラフラする けど 僕も自分の仕事に 誇りがある

君はもつともつと光るべきなんだ だから・・・・・

あとは君の 君自身の問題だけね 黙つていられなかつた

「・・・・・・・・・・・・

「「一ヒー 飲もう 飲み終わつたら送つていくよ

「・・・・・・・・・・・・

宏は何も言い返せずにいた

吉田に指摘された言葉達が胸に刺さつていた  
がむしゃらにこなしてきた仕事に正直自分でも納得がいつては  
は思つていなかつた

大沢に認められたい 大沢が認めてくれればそれでいい  
そんな風に思つていた

だから

正直 薬で好きにされそになつた時よりショックだつた  
変わりたい そう願つた自分に 吉田のくれた言葉達がありがたか  
つた

「送つていこひ」

「はい」

「彼が一田も早く田覚める事を祈つてるよ

「はい・・・・・ ありがとうございます」

「あんな事をしておいて言えた義理じやないけど

無理して自分を切り売りする事はないと思つよ・・・・

君らしく 大切なものを大切に想いながら 生きていくて欲しいよ

「・・・・・ 吉田さん・・・・

「君がキャラキャラしたイマドキの若者だつたらよかつたのにな（笑）

こんなひどい罪悪感に苛まれる事もなかつただろうに

僕は心底自分をイヤな奴だと思って後悔したよ（笑）

今から君に見なおして欲しいなんて言えないけど・・・  
それでも どうか 僕の気持ちもちょっとくらこどりかひっかけ  
ておいてくれよ

「・・・・・はい」

「それじゃ また仕事で」

「はい・・・・・送つて頂いてありがとうございました ハーヒーご

馳走様でした

「うん ジゃあね」

吉田は 宏を病院の前で下ろすと そのまま軽く手をあげて微笑んで去つていった  
月明かりが白く宏を照らした

## 23・大沢たかし・生還

23・大沢たかし・生還

面会時間を過ぎた病院の中は静かだった  
特別に入れてもらつた大沢の個室で 宏はベッドの傍らに椅子を置  
き腰掛けていた

眠り続ける大沢の顔を見つめていた  
今はもう痛々しい包帯も 沢山のチューブも繋がれていない  
ただ そこに横たわり静かに眠り続ける大沢の姿があつた

宏は大沢の手をとるといつものように指の爪を切り始めた  
一人 誰にともなく 聞く人もいないはずの部屋の中でぽつりぽつ  
りと  
自分の心のうちを語りながら爪を切つた

「俺は・・・結局何も判つてなかつたつて事だよな・・・仕事の  
事も 自分の事も  
気づかないフリして過ごしてきたつて事なんだ・・・するかつたな  
大沢がいてくれるのだつて 当たり前に思つて  
いつでもこの手を差しのばしてくれてるつて甘えてたんだよな  
いざ その手をとろうつて思つた時には遅かつた・・・  
俺 大沢に伝えてないんだよな・・・好きだよ・・・とつてもと  
つても

いてくれるのが当たり前だと思つてた  
いなくなるなんて考えた事もなかつた  
でも

生きてこうしてここにいてくれるだけでもいい  
お前が死んでしまわなくて本当によかつた・・・好きだよ・・・大

沢・・・

宏はちいさく眩きながら握りしめていた大沢の手の指先にそっと口づけた

「疲れたな・・・寂しい時つて何かしてないともたなくて・・・がむしやらに働いてみたんだ でもダメだつたさつある人からも言われたんだ 自分にちゃんと向き合わなくちやダメだつて

大沢もずっと俺にそう言つてたんだよな・・・自分に正直に生きるつて事

簡単そうで難しくて でもやつぱり一番大切な事なんだよな・・・疲れたんだ・・・明日から・・・明日からまた頑張るから 今日はもう

弱虫な俺のままで許して・・・」めんな 大沢・・・

宏は大沢の手を握りしめたままそのベッドに頭をのせた  
椅子に腰掛けたままベッドに顔をふせ 間もなく宏は静かな寝息を立て始めていた

病室の薄いカーテン越しに朝日が眩しかつた  
ベッドにつつぶしたまま眠り込んでしまつた宏は 後頭部に優しく触れる何かの感触に

穏やかな気分で目を覚ました

「んん～つ・・・いつけねえ・・・寝ちゃつた・・・つあつ・・・  
「おはよう 宏  
「・・・・・・・・・・・・」

宏の髪をやさしく撫でていたのは ベッドに横たわつた大沢の手であつた

優しい笑顔で目を細めて宏を見つめる大沢の姿に

宏は我が目を疑つた

しばらくの間 まだ自分は夢の中にいるのかとさえ思つた

宏は声もなく 大沢の顔を見つめていた  
大沢が目を覚ました

我に返つてナースコールをしたのは それからどれ位の時間がたつてからだつたろうか  
駆け付けた医師とナースたちによつて大沢はすぐに検査室へと連れ去られてしまった

宏はただ呆然と病室に残された

ようやく気持ちが落ち着いてきて初めて 宏は幼馴染みの携帯メールをいれた

「大沢が目を覚ました」たつたそれだけの短いメールだつた  
宏は大沢が検査を終えて病室へ戻るまで 椅子に座つて待ち続けた  
飼い慣らされた犬のようだ ただ静かに座り続けていた

驚いた事に 大沢は検査から車椅子にも乗らず 医師達に支えられてはいたが  
しつかりとした足取りで 病室へと戻つてきた

そして 宏の顔を見ると顔中に華やかな笑顔を見せた

「・・・宏・・・」

「大沢つ！」

言葉が見つからず 宏はただ大沢の手をとつた

蕩けるような優しい笑顔で大沢がそれに答えて宏の手をきゅっと握りかえした

医師達が一通りの検査と処置を終え病室を出て行くと  
宏に向かつて大沢はしつかりとした声で言つた

「ずっと・・・ずっと夢を見ていたんだ 寺山の・・・宏の夢  
もう一度必ず会える 会いたいってずっとずっと願つてた よかつ  
た俺戻つて来られた」

「ばか・・・・・」

「三途の川つてホントにあるぞ 僕見てきたからなあ・・・嘘じや  
ない

宏が反対岸から帰つてこい帰つてこいってしつこく叫んでたから仕  
方なく帰つてきた」

「ばあか」

「もう少し 優しくしてくれ」

「バ力野郎」

「心配かけてすまなかつた」

「大馬鹿野郎」 宏の声は少し震え 瞳は涙で滲んだ

「事故つたんだよな 俺・・・女の子は無事だつたのかな・・・?」

「ああ・・・犬も女の子も擦り傷一つなかつたよ」

「よかつた・・・」

「お前は2年近く意識も戻らず タイムトラベルつて気分だろ?」

「そんなにつ・・・そうか・・・そつなのか・・・」

「でも・・・でも本当にヨカッタ お前が戻つてくれて・・・」

「うん」

「大沢・・・・」

「ん?」

「ちゃんと言つよ・・・俺・・・まだ大沢は俺の事想つてくれてる  
か?」

「・・・・・宏?」

「俺・・・大沢の事 大切に想つてる 好きだつた ずっと

たぶん 高校の頃からずつと・・・卒業式に素直になれなかつた  
すまなかつた」

「宏・・・・」 大沢の瞳が優しく細められる

「お前の爪……ずっと切つてやつたんだぞ 僕の爪……キレイにしてくれよ……」

「おうつ……退院したら……俺がずっと切つてやる」

「うん」

覗き込むように顔を近づけた宏と受け止めるように微笑んだ大沢の一人の唇がどちらからともなく静かに重なった  
すれ違い 掛け違つてしまつた時間を埋めるように  
二人はお互の唇を求め合つた

## 24・一人の時間 再び

### 24・一人の時間

目を覚ました後の大沢は医師達が驚く程の回復を見せた

その後2週間程病院で過ごした後

あとは通院によるリハビリで大丈夫でしょうとの診断を得て 無事退院した

宏は友人から車を借りて 大沢の退院を迎えて行った

「じゃあ 僕 車返してくるから また後で寄つてもいい?」

「もちろん・・・待つてるよ」

「ああ・・・じゃあ また後で」

「宏つ！」

「なに?」

「事故るなよ・・・今度はお前だつたりしたら洒落にならない」

「(笑) わかつてる 気をつけるよ じゃあ」

「ああ・・・じゃあ また後で」

大沢は一人残つた自室で病院から持ち帰つた荷物を片付けた  
2年近い年月 主を待ち続けていた部屋は時が止まつたままだつた  
あらかじめ 宏が簡単な掃除をして片付けておいてくれた為  
それ程にひどく荒れた様子もなかつたが  
壁にかけられたままのカレンダーが事故の日からそのままになつて  
いた

ぼんやりと座り込んでいた  
長い夢から覚めた  
戻ってきた

そして

宏が自分を好きだという  
これはまだ夢の続きなのではないだろつか・・・・

大沢はふと忍び寄る不安におののいた  
思わず両手で自分の身体を搔き抱いた  
力チャリといつ小さな音と共に静かな足音が背後に迫り  
怯えたように腕で自分を抱き締めている大沢を背中から暖かいもの  
が包んだ

宏だった

「どうしたの？大沢？」

大沢の耳元にそっと囁きながら宏は大沢を抱き締めた  
「なんでもないさ・・・・まだ夢を見ているような気がして」  
「夢じゃない 大沢は帰つてきたんだ この部屋に俺の前に」  
「宏？」

「ん？」

自分の胸元にまわされていた宏の腕を掴むと  
大沢は宏を自分の膝の上へと抱き寄せた  
引き寄せられるように腕をとられた宏は素直に大沢の腕の中に収ま  
つた

「どうしたの？大沢・・・・」

「宏・・・・本物だ・・・触れる事ができる・・・・」

「うん・・・・本物だよ 沢山触つて」

「俺の宏」

「うん・・・・爪の先まで全部」

「もう離さない」

「どこにも行くなよ・・・俺を置いて  
もうどこにも行かない」

「うん」

「宏・・・・一緒に・・・一緒に暮らさないか?」

「大沢・・・うん もう少し広い部屋を搜さなくちゃいけないな」

「いいのか?」

「ああ 僕も大沢と一緒にいたい」

「宏・・・・」

「ん・・・・」

大沢は宏をそつと横たえると唇を寄せた

重なる唇 深くなる口づけ 絡む舌先から頬へと唾液が伝づ

「おおおおせ・・わ・・・・ 僕・・・・ 僕・・・・」

「愛してる・・・宏」

「うん・・・・・」

「抱かせて」

「うん・・・・・」

大沢は小さく頷いた宏の白いうなじに噛み付くよう口づけた

## 25・求め合つて 溶け合つて

25・求め合つて とけあつて

時が巻き戻されていく

桜の花びらが舞い散る中へ 青春といつぬの日々へ  
二人の時間が戻つてゆく

あの日

受け入れることが出来なかつたのは  
彼ではなく 自分の本当の心の声

今はそれに素直になれる

宏は大沢の重みを胸に暖かく感じながらそう思つた

「宏・・・・」

耳元で呼ばれる自分の名が心地よい

ひとつずつ外されていくボタンの数をほんやりと数えた  
見つめられている胸元で 触れられる前からその尖りが震える  
そつと口づけられて 身体がぴくりとはねる  
啄むように何度も繰り返し口づけられて

ふつくりと充血して尖つたそれに柔らかく歯をたてられて  
宏の口から耐えきれず甘い吐息がこぼれた

背中に薄い絨毯が擦れるのをわずかに熱いと感じた  
胸元に与えられる刺激から逃れようと無意識に身体をよじる  
肩を掴まれ抱き戻され 端いだ拍子に唇を塞がれた  
大沢の舌に口腔を犯されその動きに翻弄される  
意識が白く霞みはじめた頃

宏はふいにふわりと抱き上げられ固く閉じていた瞳を開いた  
「・・・おおさわ?」

「寝室へ行こう」

抱き上げられたまま寝室のベッドへと運ばれる

固いスプリングの上にそつと下ろされ

そのままわざかに身体にまとわりついていたシャツを剥ぎ取られる  
下着ごと履いていたジーンズを脱がされ

宏は生まれたままの姿でたよりなくシーツを掴んだ

「宏・・・・キレイだ 本当にキレイだ」

もどかしそうに自分も着ているものを全て脱ぎ去ると

大沢は宏に重なるように覆い被さつてきた

触れ合う素肌が温かく心地よかつた

宏の滑らかな肌を確かめるように大沢の手が身体中を滑る  
淡い茂みの中で既に腹を叩く程に昂ぶつっていた宏自身に

大沢の手がそつと伸び それを包み込むように愛おしそうに握りし  
めた

「つふああつ・・・・」

宏の口から耐えきれず嬌声が漏れた

吐息の全てを奪うように大沢の唇が重ねられ

深くなる口づけと 大沢の手によつてもたらされる刺激とで

宏は身をよじりその快感に震えた

目尻に涙が滲んだ

大沢の唇が宏のうなじから胸元を這い  
下腹部へと滑るように下がつていった

その先端から甘い蜜を零しているかのように

大沢はちるちると舌先を尖らせて宏のそれを舐め取つた

「あつ・・・んんつ・・・・」

激しそぎる刺激に思わず宏の腰が逃れようと浮いた

抱き戻されて 大沢の舌は宏の最奥の薺を啄んだ

「いやつ・・・・あ・・・・」

思いもしない場所を存分に嬲られて

宏は左右に頭をふり 乱れた前髪は白い額に散つた

大沢の髪に指を絡ませ引き剥がそうと弱々しくもがくが許されず  
大きく開かされた膝と内腿を押さえ込まれ

宏の昂ぶりは蜜を溢れさせ続けた

大沢は宏の先走りの蜜を薔へとやわやわと塗り込み  
その入り口を丁寧に解し始めた

挿入された大沢の指の感触にぞわりと宏の背中がたわんだ  
ゆっくりと解されるうちに 宏の全身から力がかくりと抜けていった  
指は一本に増やされて その圧迫感が腹に迫る  
しかしそれがある一点を擦りあげた瞬間

「ひあああつ・・・」

宏はたまらない愉悦に襲われ一気に押し寄せる射精感に目を見開いた

「い・い・い・い・の? 宏・・・」

大沢は確かめるようにその一点を執拗に擦りあげた  
「いやつ・・・だ・・・そこ・・・だめ・・・」

言葉とは裏腹に 宏の腰はその刺激を求めるように揺れた

「ゆ・・・ゆび やだ・・・もつ・・・もつ」  
「ん・・・宏・・・力抜いて」

「んん・・・・・」

大沢もまた既にはちきれそうな自らの昂ぶりを持て余し  
その熱くたぎる自身で宏の薔を貫いた

ゆっくりと押し広げられてゆく薔がたまらなく淫猥で魅惑的な蠕動  
を見せる

大沢は夢中で宏の身体を抱き締めた

その最奥まで腰を埋めた時 宏の瞳からぽろりと大粒の涙が零れた

「宏・・・・つらい?」

「ううん・・・平気」

「動いても・・いい？」

「うん・・・大沢がもつと欲しいよ・・・」

「煽るな・・・いきそうになる」

大沢はじらすように腰をゆすりあげ 宏の内側の一点を刺激し続けた  
甘く痺れるようなその刺激に宏の腰はくだけたように震えた  
耳朶を甘噛みされ 唇を奪われ

最奥を貫かれたまま 昂ぶりを大沢の手によつて擦りあげられた

「もつ・・・イク・・・いかせて・・・」

宏の甘い声が掠れ 大沢もまた限界を迎えた

大沢の背中に爪をたて

力の限りに抱き締め合つたまま 二人は同時に白い飛沫を放つていた  
身体の奥で弾けた大沢の熱を感じ  
宏は今までにない幸福感を味わつていた

## 26・青春といつも想ひ出す日々に

遠い日の想い出 青春といつも想ひ出す日々に出逢った少年たちのその後を私は知らない

一人で暮らす事にしました 近くに来たときには寄つて下さい  
そんな簡単なハガキが届いたのは 大沢が退院してから  
三ヶ月程たつた頃だつたと思う

私は彼らを訪ねる事はしなかつた

そうして 掛け違えたボタンのように彼らとの接点は遠のき  
私は自分の人生における彼らの存在を過去に置き去りにした  
恋しくてたまらない少年たち  
愛しくて仕方のない少年たち  
そんな一人を私は忘却の彼方へと押しやつた

少しはその面影を搜していたのかかもしれない  
その後 私は 一人の青年と恋をした

彼は落ち着いた人柄が大沢を思い起こさせ  
優しい笑顔が宏に少し似ていた  
私は彼と家庭を築く誓いをした

病めるときも健やかなる時も 常に汝これを愛すると誓うか  
はい と応えた一瞬 脳裏に一人の少年の顔が浮かんだ  
顔を覆う白いベールをあげられて  
静かな口づけに愛を誓つた一瞬に  
私は彼らの事を思つた

彼らは

どんな人生を辿るのだろうか

恋が許す範囲を踏み出した時 彼らの前に果てしなく広がる未来は  
決して平坦なものではないだろう

彼らは手をつけなき その道のりを超えてゆくのだろうか

今

穏やかな愛に包まれて 平穏な日々の中ゆるりと流れの時に身を任せ  
ぬるま湯につかつたような心地よさと  
日だまりでまどろむような穏やかさに慣れてしまいそうになる  
そうして あの胸を焦がし 涙した日々を懐かしく思い出す  
恋はきらきらと美しく その期間限定のトキメキは強かで残酷だ  
彼らを その残酷な時が引き裂く事がないように  
彼らもまた いつかこの穏やかな時の流れに身を任せた日を迎える  
すように

私はそう祈らずにはいられない

彼らに会いたいと今思つ

でも

私の前にもう彼らはない

風の便りに 大沢が弁護士になったと聞いた  
宏はモデルから俳優への転身をはかり それなりの成功を収めたら  
しい

テレビに無縁な生活を送る私は なかなか  
その懐かしい顔に出会えずにいた

しかし 書店に並ぶファッショングルの表紙を飾る彼を見かけると  
懐かしく また嬉しくて嬉しくて 二もなく買い求めたりもした

現実感が今ひとつ伴わないものの

見かける宏の姿はどれも自信に満ちあふれて  
希望と夢と愛を全身に満たしているように見えた

二人がこれからもずっと 共にその人生を歩んでいきますように  
何者をも彼ら一人をわかつ事ができないように  
また 彼らのどちらかが先にこの世を去る事もないように  
私は 出来うる限りの祈りを心に唱えていた

青春という名の日々に  
私の出逢った二人の少年  
彼らの人生に幸せな日々が在らん事を祈る

Fin

最期までお付き合って頂きました  
感想・コメント・批判・「」意見 何でも結構です  
どうぞ一言 *tenosuke*へお聞かせ下さいませ  
よろしくお願い致します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9344d/>

---

青春という名の日々に

2010年10月17日02時46分発行